

一橋大学大学院 経済学研究科

ディスカッション ペーパー

DP Number: 2008-1

物流データ（1876年）にみる植民地期ベンガルの
流通・市場・生産・消費構造

谷口 晉吉

一橋大学大学院
経済学研究科

2008年2月

物流データ（1876年）にみる植民地期ベンガルの流通・市場・生産・消費構造¹

<はじめに>

1 研究の全体構想の中での本稿の位置づけ

私は1998~2000年にかけて行った科学研究費プロジェクト*Development and Culture in Asia - Comparative Study on Grassroots Solidarity among Peoples in Asian Countries* (研究代表者 谷口晋吉)の報告書 (March, 2000) において“Regional Structure of Bengal Agrarian Societies in the late 19th Century”という論文を書いてベンガル農業社会の地域構造に関する試掘的な考察を行い、更に、そのフォローアップとして「植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造 I、II、III-1 & 2」『一橋大学年報経済学研究』44、45、46、47 (2002~5年)という4本の論文を書いた。

また、第19回南アジア学会全国大会 (2006年) のパネル討論会「18世紀インド」における発表 (“Situating Eighteenth Century Bengal: The Co-existence of ‘Indigenous Space’ and ‘Colonial Space’” (JJASAS, No.18, 2006, pp. 217-223)において、18世紀後半から20世紀前半にかけてのベンガル州の歴史を商業的農業の発達、在地社会的領域、植民地的領域、両者の融合、植民地的近代化などのキーワードを用いて整理した。

また、これらとは別に、18世紀後半のベンガル地方の米取引を展開したカルカッタ²大学に提出したPh.D.論文³、Buchanan報告に基づく論文（「19世紀初頭北ベンガルの流通と手工業—ブキャナン報告に基づいて」『一橋論叢』98-6、1987年、925-950頁）、18世紀後半ベンガル地方の市場構造に関する数本の論文 (“Situating Market Relations in the Late 18th Century Bengal," in Proceedings of Indian History Congress, 56th Session, 1996, pp.573-593)、その日本語版（「18世紀後半ベンガル農業社会の貨幣化と農村市場に関する一試論」『一橋論叢』116-6、1996年、1027-1048頁）などを書き、18世紀後半から19世紀初頭の植民地支配初期ベンガルにおける市場構造に関する研究を行ってきた。

本報告は、英国植民地支配期における農業社会の変容を見据えながら、これまで私が行ってきた農業社会構造（農民、職人、商人など生産・サービスを行う諸階層とさまざまなタイプの領主・地主が織りなす農業社会の構造分析）、地域類型、市場構造、そして、植民地統治という4つの研究視点を引き継ぎ、さらに推し進めることを意図するものである。

本稿を嚆矢とする一連の作業では、19世紀後半から20世紀前半のベンガル州の物流構造の特質とその変容を跡付け、それを植民地支配の深化（周知の帝国主義的な従属経済構造の確立であり、現代的に言えば帝国主義的グローバリゼーションの進行である）としてのみでなく、ベンガル州の地域構造や内的変動とも関連させて理解することにより、通説を

¹ 本研究は文部科学省科学研究費（プロジェクト名「アジア地域の「グローバル化」—市場、制度、アクターの長期的考察—」；課題番号18201045）の補助を受けて行われ、同プロジェクトの2007年度第2回研究会（2007年5月25日）において行った報告に大幅に改訂を加えたものである。

² 当時の表記はカルカッタ Calcutta であるが、後に公式にコルカタ Kolkata と改められた。

³ “Chapter 5 The basic Conditions of the agricultural Production”, in Shinkichi Taniguchi, *Structure of Agrarian Society in Northern Bengal (1765 to 1800)*, submitted to Calcutta University, 1977.

超えて、この時代のベンガルの内在的な把握を試みたい。この作業は、19世紀末の民族主義的経済学者ダッタR.C.Duttが内的流出internal drainと述べた事象(彼はその発想を示すだけに留まっている)⁴をより具体的に把握することにもつながるであろう。

もう少し具体的に言えば、本発表における物流に関する考察を、他の時系列資料群である『年次教育報告書』(1835年～)や農業統計 *Agricultural Statistics of Bengal* (1891年～)、季節作物報告 *Season and Crop Report* (1900年～)、人口センサス *Population Census* (1881年～) などの分析に重ね合わせることによって、最終的には植民地支配下のベンガル農業社会の市場構造の展開・商業化と現地社会の質的な変容とを総合的に把握することを試みたいと考えている。

上で触れた人口センサス・データと農業統計データの利用について簡単に言及しよう。筆者は、拙稿『地域構造』(2002~05年)において、ベンガル東部3県を対象として、県内各地の経済動向と県の人口重心の移動とが非常に敏感に関連していることを示した。これら3県では圧倒的に農業生産が重要であったので、その経済動向を農業統計データから論じることが可能であり、又、各県の人口重心の移動はセンサス報告に含まれるタナ(県の下位行政単位)別の人口データから考察が可能であった。3県に関するこのような分析をベンガル全域に及ぼして考察してみることで植民地後期ベンガルの経済社会構造の理解にとって極めて有益な知見を得られるであろう。そして、本稿で扱う流通データは、ベンガル州の地域的人口分布構造と各地域の経済動向とをつなぐ重要な情報を含むといえる。

『年次教育報告書』(*Public Instruction in Bengal, Review of Education in Bengal*)を分析して1870年代から教育が徐々に農民階層の中に浸透していく様相を各県・地域ごとに追うことによって、(1)恐らくジャウト栽培を筆頭にしたベンガル農業の商業化・グローバル化によって向上した農民家計所得を背景として、かなり広範な農民世帯に子弟の教育に投資する一定の余裕が発生し、(2)また、彼らの強い教育願望が大地主層を動かし、校舎などの寄附行為に結びついて教育施設の充実をもたらしたこと、(3)農業社会の内側に(宗教教育ではない)西洋型一般教育を受け入れる社会的な状況が醸成されていたことなどを仮説として提示することが可能になるのではないかと予想している。植民地政府の指導する学校制度の樹立・拡大を通じて農民大衆の中に「近代的な」発想や価値観が徐々に浸透し始め農業社会の「近代化」が進行したという論点は、もし仮説が検証によって支持されれば、この時代の歴史解釈にとって重要な意味を持つ。例えば、現地社会的領域と植民地的領域という先述の単純な2分法では19世紀後半におけるインド経済社会を理解することはもはや困難であり、両者の融合が進行したという仮説に一定の根拠が与えられることになる。この様に、『年次教育報告』の分析を通して、直接的な検証資料の欠如のためにアプローチすることが困難であった商業的農業の展開と植民地的近代化との相互関係を論ずる重要な手がかりが得られると期待される。そして、これによって、植民地下ベンガルの社会変容に関する構図を提示することが可能になるのではないかと考えている。

⁴ R.C.Duttの議論については、R.C.Dutt, *The Economic History of India*, vol.1, 2nd Ed., 1906, pp.85-6.

以上、本稿をより広い研究構想の中に置くことを試みた。

最後に、3点にわたって本稿の立場を弁護しておきたい。第1は、本稿ではあるいは過剰と思われるほどに地名、県名、市場名に拘る点である。これは、本稿が幅広い研究者と共にベンガル地方史の専門的研究者をも意識しているからである。私が資料の読解から知りえた地域情報を後者の方々と共有し、それらの方々からさまざまなコメントやアイデアを頂けることを望んでいる。第2は、1876年という1時点しか扱っていないことである。これは、本稿が今後1922年までの『年次報告書』を読んでいくためのベンチマークとしての意味を持つからであり、本稿で報告した状況に時間の進行と共にどのように変化が訪れたかを解明するための作業の最初の一步を印しているからである。第3は、『年次報告』に依拠する本稿では物流の流れの記述が延々と続くことである。しかし、ここで記述される物流の背後には必ずそれを支えた商人、生産者、消費者がおり、また、彼らによって構成された市場構造や社会経済構造があるのであり、物流の時系列的な変化は、生産者や商人、消費者、市場構造、そして、社会経済構造における対応した変化を伴っていると考えることが出来るであろう。

以下においては、研究の初期段階における初歩的まとめを超えるものではないが、「物流データにみる1876年前後のベンガル州の物流を中心に、そしてその背後に控える市場・流通・消費・生産構造についても、考察する。

2 本研究で使用する資料とその性質

本稿で利用するデータは1876年から1921年まで46年間にわたって毎年刊行された「ベンガル域内商業報告」(*Report on the Internal Trade of Bengal*)⁵である。英国の大英図書館(British Library)所蔵のこの報告書をほぼ隔年ごとにマイクロ・フィルムに撮影したものを利用する。インド西ベンガル州の州都コルカタにある西ベンガル州政府官房図書館(West Bengal Secretariat Library)にも同資料一式⁶が所蔵されているが保存状態は劣悪であり、利用は困難である。

ところで、英国植民地統計に共通する傾向としてプラグマティズムを挙げることが出来る。多くの統計・資料シリーズが刊行されているが、刊行初期は内容が定まらないことが多く、各種の関連調査が行われ、それらの情報が収録される。やがて収集する内容が定まってくると、それ以外の雑多な情報は排除されていく。また、状況に変化が生じれば、それに応じて集められる情報の種類や基準・定義、収集方法などにも適宜変更や改良が加え

⁵ 但し、この報告書のタイトルおよび内容は一様ではない。初期には、河川流通が重要であったが、やがて鉄道流通がそれを圧倒したことが、タイトルの変化に反映している。すなわち、1876年から1900年までの『河川による域内貿易』(*Report on the Internal Trade of Bengal*)という名称の旧来のシリーズ(IORLの請求番号V/24/4190-4200)に加えて、1891年からこの変化に対応すべく「鉄道による貿易の報告(The Report on the Rail-borne Traffic)」という言葉がタイトルに入った新たなシリーズ(V/24/4205-4237)が編集され、このうち1891~1900年の期間については両シリーズが共に発行されている。だが内容的に言えば、既に述べたように、旧シリーズにも鉄道輸送統計は記録されているのである。ダブって発行された期間の両者の内容の異同を明らかにする必要があるが、これは、本論文執筆の時点ではまだ果たしていない。タイトルの詳しい変遷は付録1を参照されたい。

⁶ 但し、コルカタにある報告書と大英図書館所蔵のものとは編集の仕方が異なっており、両者の突合せが望ましいが、現時点では果たしていない。とはいえ、年次報告書の開始年と最終年は一致している。

られる。このため、一見して同じフォーマットであっても、時間が隔たるデータ間の数値上の変化には、実態の変化によって生じたもののみならず、情報収集方法の改善・変更等によってもたらされたものが混在することになり、十分な資料批判なしにその統計を利用することは危険である。

年次報告書の刊行初期には多様で詳細な情報が含まれるが、時がたつに従って定型化、ルーティン化し、数値の羅列になっていく傾向があることを指摘したが、このことは本稿で利用する域内貿易統計についても当てはまる。例えば、このシリーズの第 1 巻には、ベンガル州内各県の県単位の商品輸出入統計表が与えられているが、この貴重な表は第 2 巻以降にはもはや提供されていない⁷。

3 物流統計収集の組織と記録方法

なぜ 1876 年に、この統計資料の組織的収集が開始され、刊行されたのであろうか？海外貿易に関しては、すでに 19 世紀前半から関税局(Custom House)が貿易統計を記録し公表してきたが⁸、ベンガル州内の各県間、ベンガル州各県と隣接州各県の間、又、コルカタとベンガル州各県および隣接州間の陸上・水上貿易、鉄道による物流に関しては、コルカタ近辺の運河の使用料徴収記録があるだけで、それ以外の地点に関する記録は存在しなかった。

1872 年にジョージ キャンベル George Campbell 準知事（在位 1871 年～1874 年）によって河川の物流を記録する試みが、ガンジス上流域とベンガル州との間の物流の要所であるサヘーブガンジ Sahibganj で開始された。このサヘーブガンジはビハール Bihar 州のラージマハル Rajmahal 北西 30 マイル弱にあり、ベンガル州、ビハール州、北西諸州 North Western Provinces の 3 州間の輸送物資が必ず通過する地点であり、物流調査にとって優れた立地条件を備えていた。この記録所の成功を受けて、1875 年ベンガル管区 Bengal Presidency の準知事 Lieutenant Governor リチャード テンプル Richard Temple（在位 1874 年～1877 年）は当時英領インド最大の貿易港であったコルカタから輸出される商品が域内のどこから供給されているのか、また、コルカタ港で積み下ろされたヨーロッパ商品が域内のどこに送られているのかを詳しく解明することを目的として、域内全体の物流を把握しようとする記録所網の設立に取り掛かった。インド経済の一層の従属化により当時急増しつつあったヨーロッパ（主に英国）とインドとの間の輸出入貿易を背景にして、その域内供給地・域内市場地・物流経路を数量的に明確に把握することの重要性を植民地政府が認識した結果であるといえよう。その他に、各地で発生した飢饉や食料不足・物資不足に対する対策を講じるためにも、物流データの収集は緊急の政策的必要性を持ったであろう。

最小限のスタッフで最も効率的に、また記録役人の介入により商業活動が阻害することなく、物流データを捕捉するためにはどの地点に物流記録所を設けたらよいかを検討され

⁷ 各年次の報告書に与えられた諸統計表から主要産物については県別仕分けがある程度可能であるが、その仕分け作業には多くの困難が伴うと思われる。

⁸ 実際にはムガル州政府の河川通行許可証 (dastak) システムを引き継ぐ形で、既に 18 世紀後半から主要河川の物流統計が取られていた。谷口「18 世紀後半ベンガル農業社会の貨幣化と農村市場に関する一試論」(1996 年)を参照されたい。

た。この結果選ばれた記録所の配置は、表1にまとめてある。

各記録所には赤い旗が立てられ、川筋を通過する全船はそこで一時停止し、積荷の種類、目的地、船頭 (manji) の名前を報告することが義務付けられた。報告が済んだ船には、これらの報告事項と記録所、記録官名を記した簡単な記録済み証明書 (遡行する船には赤い証明書が、川下に向かう船には青い証明書) が与えられた。これらの証明書の回収は、青券はコルカタ (東ベンガルから来た荷はコルカタ 運河で荷を降ろし、北部ベンガルやガンジス河上流域からの積荷はフーグリ Hugli の波止場で荷を降ろすので、青券はこれらの場所で回収された) で、赤券はビハール州のパトナ Patna、ドウロリー Durowli、東ベンガルではチルマリ Chilmarī、ボイロブ バザル Bhoirub Bazar で回収された。この様にして、主要河川の物流を記録する組織が整備され、1875年9月1日から記録が開始された (地図参照)⁹。

物流を実現する輸送方法は、河川輸送 (現地船 country boat と蒸気船 steamer)、鉄道 (路線ごと)、道路に分類され、予め用意された 38 区分の商品一覧表 (表2) を用いて、それぞれの商品の物流が記録され、集計された。

又、大都市 (コルカタ、ダッカ)・重要市場 (ナラヨンガンジ Narayanganj、シラージガンジ Sirajganj、ゴアランドー Goalundo など) ごとに主要物資の輸出入の詳細が記録されると共に、輸送ルートも調査されており、その中でも、住民生活上、また、政治上で重要な意味を持つ食穀 (米) の輸送記録は特に詳しく記録されている。

蒸気船による物流については、ベンガル州の蒸気船会社インド一般蒸気船運行会社 (The Indian General Steam Navigation Company) と河川蒸気船運行会社 (The River Steam Navigation Company) の両社の運行記録が利用された。

主要幹線道路の輸送も記録された。ベンガル湾からフーグリ川に入る最先端の港湾ダイアモンド ハーバー Diamond Harbour からコルカタ、又、コウラプクル カルガッタ Kowrapukur Khall Ghat からコルカタへの道路輸送が記録され、又、ビハール州では Gaya パトナ間の道路輸送も記録された。

鉄道運輸統計は、毎月鉄道会社に書記官を派遣してデータ (商品名、重量あるいは数量、送付駅名) を記録した。コルカタから輸出される物資ではヨーロッパ綿布、塩が重要であり、コルカタに入ってくる物資では、食穀、油性種子、綿花、藍、砂糖などが重要である。中でも政府が重要な関心をもつ食穀については、東インド鉄道 (The East India Railway) の全ての駅で出発地、目的地が記録された。

ベンガル州内の各県とコルカタとの間の物流のみならず、ベンガル州と他州との物流にも綿密な配慮が為された。すなわち、他州との物流を以下の7つに分類し、それぞれについて、記録所が設けられたのである。

(i) 北西諸州 North Western Provinces

(ii) 中央州 Central Provinces

⁹ この地図は、1931年作成のものであり、鉄道敷設状況は1876年と比べて格段に充実しており、その点を注意して頂きたい。

(iii)南西部辺境とマドラス管区 South-Western Frontiers and the Presidency of Madras

(iv)北方辺境 Northern Frontier(ネパール Nepal、シッキム Sikkhim、ブータン Bhutan を含む)

(v)アッサム州 Assam Province

(vi)山岳部ティッペラ Hill Tipperah

(vii)英領ビルマ British Burmah

これらの統計を編纂する上で問題となる幾つかの点があった。

1) コルカタを始めとする多くの商業センター(商業結節)は、中継ぎ貿易拠点として機能しており、そこを經由して他の地域に流れていく物流と、そこを最終消費地とする物流があり、これらを区別しないと記録の重複が生じてしまう。これを回避するために、物流記録には最終送付先が記録され、両者が区別できるように設計された。とはいえ、東ベンガルの大集積地であるシラージガンジ、ナラヨンガンジ、ゴアランドーなどの中継港に小船で運ばれ、そこで大きな船に積み替えられコルカタに向かう商品などの記録重複を避けることは不可能である。

2) 個々の記録所がカバーする管轄地域内のみで物流が完結する域内貿易(local trade)はこの記録制度は捕捉されない。

3) 巧みに配置された少数の記録所でベンガルの物流の全体像を把握するが、大河を經由しないで道路のみで行われる地方間の取引は記録されない。これについては、そもそも道路のみによる物流の規模は大きくなく、重要な場合だけ特別に記録すればよいとされた。

4) この記録組織を構築するにあたっては、政府統計局が統一的に統轄し、各県に対応する末端組織を作らなかった。これらを設ければ域内貿易も捕捉可能となるが、他方で、多数の末端記録所を設けると下級役人による商業・商人抑圧を招く恐れが非常に強く、また、遠距離市場に運ばれる商品の物流記録の重複を回避することが非常に困難である、という2つの難点があったからである。

<英領期ベンガル地方における物流の全体的特徴(1876年)>

組織的な物流統計記録が開始された最初の年である1876年におけるベンガル地方の物流の基本構造を見てみたい。

表3は、ベンガルの物流全体を示すマクロ的数値を与えており、これらから幾つかの重要な概括的事実を指摘できる。なお、コルカタに入港する船舶が海外(外国)から輸入したり、海外(外国)に輸出したりする商品は新設の物流記録組織の対象範囲外である。『年次報告書(1876年)』19頁)

新設の物流記録システムが捉えた1876年のベンガル州の物流総額は約5億ルピー¹⁰である。

¹⁰ 『年次報告書(1876年)』の説明は極めて不十分であるが、表3の数値は中継輸出などによる重複を除いてであると考えてよいであろう。

表4によりその内訳を見ると、食穀 17.1% (米 11.3%¹¹、小麦 3.0%、豆類 2.0%、その他 0.8%) を含めるととなる。次いで、油性種子 11.0% (芥子菜mustard4.4%、亜麻仁油linseed5.4%、その他 1.2%)、塩 9.4%、jute8.1%、砂糖 6.2% (精白糖 3.8%、粗糖 2.4%) 藍 6.2%、茶 5.9%、絹 3.2%、原綿 2.8%、タバコ 2.1%、生皮 2.0%、硝石 1.0%、ヨーロッパ産綿類 25.1% (綿布 22.7%、綿糸 2.4%) となる。なお、これらの内、幾つかの主要物資の物流については後に詳述する。

物流量 (重量) についてみると、米が 3181 万マ¹²で最大であり、次いで、油性種子 1465 万マ、ジュート 1339 万マ、塩 943 万マ、小麦 759 万マ、粗糖 296 万マ、タバコ 214 万マ、精白糖 159 万マ、となっている。主要商品の総重量は 9407.6 万マであるから、食穀 50.4% (精米 26.6%、小麦 8.1%、粳米 7.2%、豆類 6.1%、その他 2.4%)、油性種子 15.6%、ジュート 14.2%、塩 10.0%、小麦 8.1%、豆類 6.1%、砂糖 4.9% (粗糖 3.2%、精白糖 1.7%)、タバコ 2.3%という割合となる。ちなみに、現地船の積載重量は小型船 80~300 マ、大型船 500 マとされている¹³。

輸送手段について見ると、陸上輸送と現地船による水上輸送は現地の商人・輸送業者が行っており、蒸気船と鉄道による輸送は白人系資本がほぼ完全に支配していた。陸上輸送は、都市と近郊農村、近隣市場と農村、農村内などの短距離輸送が主であり、有名な隊商 (Banjara) の牛荷による長距離輸送は、多数の水路が走るベンガル地方では知られていない。従って、ベンガルでは船と鉄道が主要な大量輸送手段である。現地船によって物流の 6 割以上が運搬されたのは、精米 73.1%、粳米 86.7%、豆類 74.6%、ジュート 68.5%、マスタード 71.1%、粗糖 77.0%、精白糖 73.6%、タバコ 80.6%、塩 70.3%であるが、蒸気船で 6 割以上を運んだのは茶 71.3%のみである。鉄道で 5 割以上が運ばれたのは小麦 63.6%、藍 73.5%、絹 53.7%、原綿 52.0%、硝石 59.3%、綿撚糸 57.4%などであり、綿撚糸を除けばガンジス河上流域で作られた産物が鉄道でコルカタに長距離輸出されたものであり、綿撚糸は逆にヨーロッパからコルカタに輸入されたものが、鉄道で遠隔地に輸出されたことを示すと考えられる。道路による輸送は非常に少なく、粳米における 12.9%が最大である。全物流の総重量 9407.6 万マの輸送手段の割合をみると、現地船 68.0%、蒸気船 1.6%、鉄道 25.3%、道路 5.2%であり、1876 年の時点のベンガルの物流において現地船による水運がなお全体の 7 割弱を占め、圧倒的に重要な輸送方法であった。こうして、重量で見るとは、未だに物流においては在地社会的領域が根強く存続していた。

表3において最も注目すべき点は、すでに 1876 年には、米の総取引額の倍にも及ぶ英国産綿布がベンガルに流入していたことである。それに、英国産綿糸、英国産塩を加えると、金額表示において英国からの輸入品はベンガルにおける物流の実に 34.4%に達する。

¹¹ なお、米全体に対する精米 (rice, cleaned rice, rice not in the husk) と粳米 (paddy, rice in the husk) の比率は重量表示で 78.6%と 21.4%、金額表示で 88.0%と 11.9%であり、精米が重量でも金額でも圧倒的に大きな部分を占める。コルカタへ出荷する以前に精米作業が地方で行われていることが確認できる。1マ当り価格は、精米 2 ル¹⁴、粳米 1 ル¹⁴とされている (『年次報告書 (1876 年)』、付録A)。

¹² マは、インドの重量単位であり、1マは約 37kgであり、また、1マは 40 シェルからなる。

¹³ 『年次報告書 (1876 年)』パラ 215、157 頁。

ジュート、茶、藍、硝石など殆ど全て海外に輸出される商品（世界商品）は21.2%を占める。なお、この統計に阿片は入っていないが、実際には金額表示において無視できない割合を占めたであろう。いずれにしろベンガル州内の総取引額の55.6%（絹を加えれば、58.8%）が植民地型商品¹⁴であった。この時期までに、如何に深く植民地的権益がベンガル経済に浸透していたかが分かる。一方的にベンガルから英国へ財の流出が生じていた18世紀末の状況は一変し、19世紀末には、英国からベンガルへの財の流入が大きな割合を占めるに至ったことも以上の数値から明瞭に読み取れる。

とはいえ、植民地型商品とその他の商品とにおいて、生産・流通・製造の過程が常に截然と区別されるとは言えない。例えば、原料ジュートの生産と末端における集荷は在来の農業、市場機構に依存しているが、それが、海外輸出向けに買い取られ本梱包されたりジュート工場に原料として売却されたりした後は、植民地的領域に属し、在地社会的領域からは切り離される。ジュートと対照的なのは製茶であり、原料の茶葉の栽培から製茶、そして、流通のほぼ全過程が植民地的領域に包摂されている。ここでは、現地人労働力の動員・編成も在来的な方法ではなく、植民地的な方法で行われている。藍はこの両極端の中間にあり、藍草の栽培は在地的農業体系の中で行われるが、収穫後の集荷過程から直ちに植民地的領域に包摂され、世界市場に接合される。

主に Liverpool から輸入された塩の輸入額が、米の総取引額の8割にも達していること、油性種子（亜麻仁種子、芥子菜種子、その他）の総取引額が米にほぼ匹敵することなども、同じく、注目される。特に、1876年の米取引は、同年の南インドにおける飢饉のために未曾有の量に達していたことを考えれば、平年は油性種子の取引額は米を上回った可能性さえも否定できない。逆に言えば、米は生存作物としての性質を強く持ち、産出量の中で地域を超えて市場化される割合は余り大きくなかったと推測される。この点は非常に重要な含意を持つが、なお、確認されるべき多くの関連する事柄があるので、仮説として提示するに留めたい。

これらの表から読み取れる以上の諸事実は、単純ではあるが19世紀後半ベンガルの商業と物流に関する我々の考察の基礎となるべき知見である。

この時期の物の流れを概観すると、ベンガル州、ビハール州、北西諸州、アッサム州の物資は河川と鉄道によって、扇の要の位置にあるコルカタに極めて大きな割合が集中し、そこから域外へと輸出される。鉄道網は多くの場合河川に平行して走り、コルカタとその他の諸地方とを結合した。また、同様に、英国から輸入された塩と工場製綿布はまずコルカタに入港し、そこから、各地に輸送された。こうして、コルカタのガンジス流域の物流拠点としての圧倒的な重要性は明らかである。この点は、次節において行う主要商品の物流の個別的な考察によって、さらに具体的に確認される。

¹⁴ 輸出あるいは輸入が植民地と宗主国資本家との間で、あるいは宗主国資本家を經由して世界市場向けになされており、しかも、その取引において植民地政府や宗主国政府によって宗主国資本家に通常の市場取引とは言い難いさまざまな優遇措置が与えられている場合を指す。

<主要商品の物流>

ベンガル域内商業の総計表（表 3）にあるように、当時の主要な域内産品は米、ジュート、油性種子、藍、茶、砂糖であり、主要な輸入品は英国からの綿布、綿糸、塩であった。ここで、これら重要商品の幾つかについて、『1876 年度報告書』から得られる物流情報を整理しておこう。

1 米

通常の農民は、米を葦（nal）を編んだ容器に入れて保管する。だが、「ベンガルのあらゆる村に数名いる富農は粃米貸しを行い、また、粃米を蔵（gola）に蓄える」¹⁵。平均収量は、1 エーカー当り粃米 15 マン（精米 10~12 マン）である。通常は粃米は輸出前に農民が脱穀し精米にする。1876 年の米価格は 1 マン当たり精米 2 ルピー、粃米 1 ルピーと評価されている¹⁶。1 ルピーの粃米は、脱穀すると 1 ルピー - 6 アナ¹⁷の白米になる。これにより勤勉な男は、家族の手助けを得ながら、1 日 6 アナを稼ぐ。

物流記録制度で記録された市場化された精米の総量は 24,995,800 マン、粃米は 6,810,500 マンであり、その他に、オリッサ とチッタゴンから海上航路で輸入された精米 3,137,400 マン、粃米 109,400 マンが加わり、ベンガル州の総市場供給量（総剰余米量）は精米 28,133,200 マン、粃米 6,919,900 マンである。粃米を、1 マンを 25 シェール（62.5%）の割合で精米に換算すると、ベンガル管区¹⁸全体の精米の市場供給総量は約 32,458,200 マン（端数切り上げ）となる。この内 7,497,100 マンはベンガル管区内貿易 provincial local trade であり、管区外のガンジス上流地域や海外へ輸出可能な純剰余米は 24,961,100 マン（約 2,500 万マン）となる。この内 260 万マンはオリッサから域外に海上輸出され、70 万マンはチッタゴンから域外に海上輸出され、1,840 万マンはコルカタに送られ、残る 330 万マンは（ベンガル管区内の）米輸入県で消費された。

下表はベンガル管区の米輸出県と純輸出量を示す。

	総輸出 (精米)	総輸入 (精米)	純輸出 (精米)
	マン	マン	マン
Bakarganj	3,658,100	89,200	3,568,900
24 - Parganas	2,815,700	129,900	2,685,800
Bardman	2,250,300	8,400	2,241,900
Mednipur	2,582,400	448,700	2,133,700
Balasore	1,507,900	100	1,507,800
Mymensingh	1,484,200	151,000	1,333,200

¹⁵ 『年次報告書（1876 年）』パラ 13、21 頁。

¹⁶ 『年次報告書（1876 年）』Appendix A-I, p.iii.

¹⁷ ルピーは銀貨であり、1 ルピーは 16 アナ。

¹⁸ ベンガル管区（Bengal Presidency）は、ベンガル州、ビハール州、オリッサ州を含む広域の行政単位である。

Dinajpur	1,235,000	400	1,234,600
Rajshahi	1,146,300	3,600	1,142,700
Tipperah	1,082,400	33,900	1,048,500
Murshidabad	1,066,500	29,700	1,036,800
Birbhum	783,800		783,800
Noakhali	777,600	6,800	770,800
Cuttack	1,082,400	338,600	743,800
Jessore	10,803,00	372,000	708,300
Puri	7,074,00		707,400
Bogra	6,128,00	800	612,000
Maldah	5,611,00	500	560,600
Bhagalpur	2,839,00	39,000	244,900
Hugli	8,164,00	609,300	207,100
Rangpur	1,926,00	27,800	164,800
Santal Parganas	2,718,00	140,900	130,900
Monghyr	1,406,00	17,400	123,200
Pabna	7,233,00	556,500	166,800
Gaya	693,00	900	68,400
Kolkata	538,00		53,800
Manbhum	482,00		48,200
Purania	1,051,00	75,900	29,200
Other districts	24,00		2,400
Total	271,416,00	3,081,300	24,060,300

ベンガル管区内の米純輸入諸県とその他の輸入諸州の輸入量合計は、3,235,300 マンである
(内訳は、次の2枚の表を参照)。

	総輸入 (精米)	総輸出 (精米)	純輸入 (精米)
	マン	マン	マン
Dacca	1,862,100	1,182,200	679,900
Sarun	598,200	56,400	541,800
Mozaffarpur	383,300	15,800	367,500
Nadia	795,300	475,600	319,700
Patna	554,700	322,400	232,300
Chittagong	839,800	725,100	114,700
Darbhanga	125,800	4,000	121,800
Faridpur	1,127,200	1,032,700	94,500

Champanan	85,600	13,300	72,300
Shahabad	58,000	7,100	50,900
Other Districts	11,900	5,100	6,800
Total	6,441,900	3,839,700	2,602,200

その他の輸入諸州は次の如し。

	総輸入 (精米)	総輸出 (精米)	純輸入 (精米)
	マン	マン	マン
Districts of Assam other than Sylhet	448,900	6,900	442,000
North-Western Provinces	646,100	455,000	191,100
Total	1,095,000	461,900	633,100

コルカタの米貿易を見てみよう。1876年、コルカタからの域外海上輸出は急増し、1,880万マンに達した（72年 1030万マン、73年 740万マン、74年（飢饉の年）400万マン、1875年 580万マン）。76年の急増はマドラス（現チェンナイ）、ボンベイ（現ムンバイ）で飢饉が発生したためで、マドラスに850万マン、ボンベイに320万マンが緊急輸出された。

対岸のハウラやコルカタ市郊外を含めたコルカタ圏の精米消費量を推定するために、コルカタ圏の人口分布を下表に纏めると、市内と近郊を併せて人口は約90万人である。

Calcutta Proper	429,535
The Suburban Municipality	257,149
The further suburbs, known as North and South Suburban Towns	89,895
Howrah	97,784
Total	874,363

1名当たり1日の平均精米消費量を0.5シェールとすると年間必要量は4.5マンであり、90万人の年間消費量は410万マンと推定される。なお、同様の精米消費量推定で1日の消費量を0.75シェールとする場合が多いが、それは労働者階級・農民などの肉体労働者を基準とするからであり、コルカタでは魚、肉その他の副食の摂取も多く、0.5シェールが妥当な量である。

コルカタへの精米輸入の70%は現地船により行われ、特にベンガル最大の米輸出地である東部ベンガル地方バカルガンジ県からの精米輸出は、殆ど現地船よった。陸路輸入は全てダイヤモンドハーバーからのものであり、ここにはベンガル南部諸県および海路ダイヤモンドハーバーに陸揚げされたオリッサ州の諸県からの輸入米が含まれた。東インド鉄道は、バルドマン、ビルブーム、ムルシダバードなどの西部・中部諸県から米を運び、東ベンガル鉄道は、パブナ、ラージシャーヒー、ボグラ、ディナジプルなどの北部諸県からの米を運んだ。オリッサ州の諸県からは海路輸入されたが、ダイヤモンドハーバーを

經由せず、コルカタ近郊のハウラに直接陸揚げされた部分もある。

コルカタからの域外輸出 1,880 万マンにコルカタ域内消費 410 万マンを加えた 2,290 万マンが 1876 年度のコルカタへの精米輸入必要量だが、この年の記録された精米輸入量(17,939,354 マン) はこれを大幅に下回っており、粳米 841,700 マン(精米換算で 526,100 マン) を加えても 18,465,400 マンに過ぎない。

残る不足分の大半は、記録されていない精米供給による。例えば、コルカタ市を取り囲む 24 パルガナ県の米は、運河を通過して有名なカリガッハタ (Kali Ghat) 寺院の対岸の巨大な米市場チッタラ (Chittara) に運ばれる。元コルカタ運河管理官 (Supervisor of Calcutta Canals) のガリフ Galiffe 氏によれば、この経路で 126 万マンの米が入荷した。メディニブル、フーグリ両県から陸路ハウラに運ばれる米もあり、これらを加えると 1876 年は合計約 140 万マンが記録から漏れた。その他、陸路でコルカタに入る約 10 万マンも記録から漏れている。また、近隣諸県から米を運んできた現地船が、波止場で荷下ろしせず直接に輸出船に積み替える場合も現在の記録システムでは記録されない。このような米は 25 万マンほどと推定される。これらを合計すると、未記録の流入米は 175 万マンほどと推定される。しかし、これらを加えても 270 万マンほどの不足部分が残る。以上を表にすると、下記の如くなる。

コルカタへの精米輸入	17,939,300
粳米輸入 (841,700 マン)	526,100
記録されない供給	1,750,000
合計	20,215,400
これに対して	
海上米輸出	18,804,700
海上粳米輸出 (34,200 マン)	21,400
コルカタ市内消費量	410,000
合計	22,926,100
不足分	約 270 万マン

では、この不足分はどのようにして補われたのか? 『年次報告書 (1876 年)』によれば、コルカタ圏内の倉庫に貯蔵される精米は 700~800 万マンと推定され、コルカタ市の消費 2 年分に匹敵する。毎年、この約半分の古米が、新米と入れ替えられ放出される。この放出米により先の不足分 270 万マンは容易に補填されるのである。多くのコルカタ市民は古米を食べ、他方、新米は輸出されるというのが現状であろう¹⁹。

コルカタへの総輸入量 2,020 万マンの供給地を大きくまとめると、

Sundarban districts²⁰ 6,850,000

¹⁹ 『年次報告書 (1876 年)』パラ 37、25 頁。しかし、これで本当に不足はなくなるのか? コルカタに輸入され新米の内から約 350 万マンが貯蔵用に買われ市場から引き上げられ、放出されるほぼ同量の古米が市場に出てくるとすれば、コルカタの市場供給量は増加しないのではないか? 当然、この様な疑問が生じる。

²⁰ Sundarbans とは、ベンガル地方南端のベンガル湾に面する大森林地帯であり、19 世紀後半から急速に開発が進み、コルカタへの米の最大の供給源として成長した。この簡単な歴史は、白田雅之、佐藤宏、谷口晋吉 (編) 『もっと知りたいバングラデシュ』、第 II 部第 4 章、1993 年に述べられている。

Western Bengal	5,700,000
Central Bengal	1,300,000
Northern Bengal	1,100,000
Eastern Bengal	2,300,000
Bihar and Upper Provinces	700,000
Orissa	400,000
Assam	100,000
Imports unregistered	1,750,000
Total	20,200,000

である。

次いで、ベンガル州内の各県の米の輸出入状況を見ていく。

シュンダルバンはベンガル南部海岸線に広がる広大な森林地帯であったが 18 世紀後半から開拓・入植が進行し、19 世紀後半には肥沃で休耕を要しないという利点をもつ米の一大産地となり、収穫期には一面黄金の穂の海と化した。ここで収穫された米はもっぱら水路によりコルカタへ運ばれた。その運河ルートは、18 世紀末に開かれたものである。

24-パルガナ県は大都市コルカタを包むように立地しており、そこで収穫された米の大半はコルカタに供給され、県内に不足が生じると近隣のメディニプル県から自家消費分を購入した。コルカタ近郊で人口周密なバラサット Baraset、ダムダム Dum Dum、バラクプル Barrackpur などで生じた米の不足分は逆にコルカタから供給された。販売された精米の 99.3% (2,506,300 マン) はコルカタに向かった。県内には輸出市場が 23 ヶ所あった。輸送手段としては陸送が全体の 52.9%を占め、次いで現地船による水上輸送が 44.8%であった。

精米は圧倒的にコルカタに輸出されたが、粳米（括弧内は精米）は、コルカタ以外の近隣諸県にもかなりの量が輸出された。ナディア県 76,100 マン (1,100 マン)、フーグリ県 41,000 マン (3,400 マン)、ジョシヨール県 18,300 マン (200 マン)、フェアドプル県 12,200 マン、ダッカ県 5,200 マン、バカルガンジ県 5,000 マン、その他の諸県 19,500 マン (500 マン) であり、県内の記録された物流は、米 11,600 マン、粳米 68,700 マンであった。下表に見られるように、この県の精米換算の総輸出量は 2,815,725 マンであり、その内、93.9%がコルカタに向かった。

県内への輸入量は精米 64400 マン、粳米 17600 マンであった。

24 パルガナ県の米の流れ

	コルカタに輸出		他県に輸出		県内取引		合計	
	精米	粳米	精米	粳米	精米	粳米	精米	粳米
	マン	マン	マン	マン	マン	マン	マン	マン
現地船	975,400	184,600	5,200	177,300	11,600	68,700	992,200	430,600
道路	1,485,400	7,800					1,485,400	7,800
鉄道	45,500	29,800					45,500	29,800
合計	2,506,300	222,200	5,200	177,300	11,600	68,700	2,523,100	468,200

ジョシオール県の北部はナツメ椰子からの粗糖生産が盛んであるが、他方で食糧生産は不足しており、同県南部やバカルガンジ県から住民の消費用に米を輸入する。他方、県南のジョシオール・シュンドルボン²¹は米作地帯であり、コルカタ以外の県にも米を輸出した。この県南からの米輸出は粳米が多いが、それは稲作の大きな部分が季節的に移動して来る農民と労働者によって行われるので収穫時に脱穀・精米する時間的余裕がなく、刈入れた稲をそのまま船に積み込んで輸出するからである。この県の記録された米輸出量は粳米 860,300 マン、精米 542,600 マン、合計（精）²¹1,080,288 マンである。この内、粳米 445,400 マン、精米 30,200 マン、合計（精） 281,483 マンが県南から県北への県内輸出である。

県内取引（県南→県北）の大半は 12 輸出市場と 12 輸入市場の間で行われる。中には、マグラ Magura のように、域内消費米の輸入市場が同時に他県への輸出市場としても機能する場合もある。

県外輸出は、粳米 414,900 マン、精米 512,400 マン、合計（精） 771,713 マンである。主要な県外輸出市場は、17 ヶ所が知られる。

バカルガンジ県は、ベンガル州内で最大の米輸出県であり、その生産米の極めて大きな部分がコルカタに輸出される。この県の米は良質であり、刈入れ後、県内市場での売買を経ることなく、直ちに輸出されることも多かった。このことは、この県では米作地帯の奥深くまでコルカタの米輸出商人のネットワークが及んでいたことを示唆する。県内の主要米市場は 32 ヶ所あり、コルカタ、ジェシオール、ダッカ、シレット、その他へ輸出された。バカルガンジ米の評判が高く需要が大きいため、農民は高値で売れる生産米の大半を輸出に回し、それによって生じる自家消費米の不足はジェシオール、シレット、マイマンシン、ティッペラなどからの輸入米で補った。

1876 年の総輸出量は、精米 3,640,000 マン、粳米 29,000 マン、合計（精） 3,658,125 マンであった。このうち、コルカタには精米 3,551,700 マン（97.6%）、粳米 600 マン（2%）が輸出された。この年はサイクロン被害とコレラの蔓延で作柄が悪く生産活動も低調であったから、平年の輸出量はこれを上回るであろう。マドラス、ボンベイ両州の飢饉のために州外への需要が大きかったから、県内の余剰米は輸出し尽くされたと思われる。

バカルガンジ県への輸入は、精米 23,100 マン、粳米 105,800 マンであった。輸入市場は 6 カ所が報告されている。近接するダッカ、フェアドプル、ティッペラ各県を経由して輸入されたと思われるが、輸入米については新設された記録所網では捕捉不可能な部分もあった。

西部諸県はいずれも米輸出県であった。メディニプル県には鉄道はないが、河川輸送網に恵まれている。フーグリ、バルドマン両県を通る河川の両岸には大きな市場が多数存在したが、ビルブーム、バンクラ両県を含めて、メディニプル県を除く西部諸県の米輸出は東インド鉄道に大きく依存し、河川輸送は少なかった。

1876 年度は、コルカタへの主要な米の供給地である東ベンガルがサイクロン、北ベンガルが旱害の被害を蒙ったので西部諸県産米に対するコルカタの需要は前例にないほど大

²¹ 以下において、精米と粳米を合計した値を、合計（精）と表記する。

きかった。しかも、西部諸県の米の作柄が良かったので、供給量は飛躍的に増えた。こうして、バルドマン県から精米 1,926,315 マン、メディニプル県から精米 1,764,277 マン、ビルブーム県から 515,894 マンがコルカタに輸出された。

メディニプル県は、約 200 万エーカーが稲作地をもつ西部諸県で最大の米生産県であり、特に、ヒジュリーHijli 地区と県東部の低地は非常に肥沃であった。県内の市場化された籾米のかなりの部分はまず立地の良いゲオカリ Geokhally に運ばれ、そこで精米加工されコルカタに輸出された。県内には、13 ヶ所の重要な米輸出市場があり、ほぼ全量がコルカタ圏に輸出された。

県外、県内どちらにおいても米は全量を運河、河川による水上輸送によった。

フーグリ県は、コルカタ市とフーグリ河を挟んだ対岸にあり、この県の米の流れは特殊である。輸入米はこの県に実際に輸入されたものだが、この県の輸出米の大半は鉄道で他県から入荷した輸入米を船でコルカタに再輸出したものである。対岸に位置するハウラ市とコルカタ市の統計は合併されているので、ハウラ市の数値を除くと、フーグリ県への河川からの輸入は精米 419,200 マン、籾米 304,000 マンである。他方、輸出は、精米 807,000 マン、籾米 15,100 マンであり、ほぼ全量が県北の市場からハウラ市とコルカタに送られる。フーグリ、セランプル、チャンドルナガル各市への鉄道による米輸送は現在の記録体制では洩れてしまう。

米の主要輸入市場は 11 ヶ所で、その中でもチャンドルナガルが群を抜いて大きい。米の供給県は、ボグラ県が圧倒的に大きく、次いでメディニプル県が大きい。この県の輸出は 98.7%が現地船により、95.5%がコルカタに入る。

バルドマン県は、ベンガル州第 3 位の米輸出県であり、特に 1876 年の輸出量は過去最大であった。主な輸送手段は鉄道である。現在の記録システムでは、コルカタへの輸出のみが捕捉され、ガンジス上流地域への輸出は漏れている。

輸出は、現地船で精米 964,200 マン、籾米 80,300 マン、鉄道で精米 1,235,900 マン、合計（精）2,250,288 マンであり、輸入は全て船で精米 5,500 マン、籾米 4,700 マンであった。

主要な米輸出市場はカトワ Katwa、バルドマン、ラニガンジ Raniganj、カルナ Kalna などであり、輸出先は、コルカタ 2,167,900 マン（96.3%）、ナディア県 42,300 マン（2.0%）、フーグリ県 31,600 マン（1.4%）、その他 6,200 マンであった。

河川による輸入市場として、ナドゥンガタ 3,400 マン、カトワ 2,100 マン、カルナ 1,700 マンがあり、輸入量はフーグリ県から 1,800 マン、コルカタ市から 2,700 マン、ディナジプル県から 800 マン、その他 3,100 マンであった。

ビルブーム県も米剰余県である。1876 年のコルカタへの輸出量は 783,464 マンで、全て鉄道で輸送された。ガンジス上流域への鉄道による輸出はこの当時の記録システムでは捕捉されない。

ラージシャーヒー地方は平年であれば巨大な剰余米を産し、その大半は暑期に倉庫に貯蔵され、雨季の始まる 6~9 月にナディア河川網を通してコルカタに輸出された。この 4 ヶ

月間のディナジプル、ボグラ両県からの輸出量は 1,105,400 マンに達する。残る 8 ヶ月間は水位が下がり河川航行は不可能となり、輸出量は 665,100 マンに低下する。

ディナジプル県から、昨年、アトライ Atrai 川、マタバンガ Mathabahanga 川・ジェリンギー Jellinghi 川を下ってコルカタに向かった精米は 753,700 マン、粳米は 900 マンであった。アトライ川沿いの市場に入荷した米はコルカタに向かい、プルナババ Purnabhaba、クレック Kuleck 川、タンガン Tangan 川沿いの市場に入荷した米はガンジス上流域に輸出される。下の表に明らかなように、この県はガンジス上流域のビハール州、北西諸州にも全輸出量の 28.3%を送っており、ベンガル州以外との商業的になかなか強い結びつきが見られることを指摘しておきたい。

ディナジプル県からの米の輸出

	精米	粳米	合計 (精)
	マン	マン	マン
ベンガル州	877,700	13,000	885,800
ビハール州	128,000	57,000	163,600
北西諸州	180,800	7,600	185,600
合計	1,186,500	77,600	1,235,000

1875 年の冬米が不作だったので、1876 年の数値は平年を大きく下回る。1876 年は豊作だったが、これは 1877 年の報告書の数値に反映されることになる。

県内の主要米輸出市場として 16 市場が挙げられる。それらは、Patiram、Kumarganj、Rangamatia、Changanj、Fakirganj、Sibganj、Balughat、Ghoraghat (Jumbazar)、Paglibandar、Sumjhia、Kaliganj、Raiganj、Brahmapur、Habra、Dinajpur、Nitpur であり、ガンジス上流域向け輸出市場としては Nitpur、Kalikamara、Assani、Now Bazar、Raiganj、Ghoraghat、Dinajpur などがある。これらの市場は、Purnabhaba、Tangan、Kuleck、Kuratiya の諸河川に沿って位置している。

ディナジプル県からの輸入米を扱うビハール州の主要市場はパトナ (42,400 マン)、レヴェルガンジ (22,300 マン)、シスワン Siswan (10,100 マン)、スフィー Supuhi (7,500 マン) などであり、北西諸州の主な市場地は、バリア ガジプル Balia Ghazipur (66,200 マン)、ガジプル Ghazipur (30,700 マン)、ベナレス Benares (19,000 マン)、ベレッタラ Belettra (22,300 マン) であった。

ラングプル県は豊かな農業県であり、コルカタに大量の剰余米を輸出するが、その大部分はディナジプル県の市場から出荷されるので、ディナジプル米として記録されてしまう。県南、県南西の剰余米は全てこうして輸出されている。そのために、1876 年のラングプル県からの米輸出は、記録上は僅か精米 164,500 マン、粳米 45,000 マンに過ぎない。主要な輸出市場は、下記の如くである。

市場名	精米			粳米
	現地船	蒸気船	合計	現地船
	マン	マン	マン	マン

Kaliganj	46,400	18,600	65,000	15,500
Kamarjani	23,200		23,200	100
Kulmoy Hat	9,400		9,400	9,700
Ghoramara	6,500		6,500	1,400
Shaghatta	6,200		6,200	
Nawabganj	4,800		4,800	
Bala	4,700		4,700	500
Durgapur				2,500
Small marts	44,700		44,700	15,300
Total	145,900	18,600	164,500	45,000

ラングプル県からの輸出先は下記の如くであり、県西部、県南部は、ディナジプル県の物流と一体化しているにせよ、県東部ではコルカタよりも東ベンガルやアッサム州とのほかに強い商業的な結びつきが見られる。

	現地船		蒸気船
	精米	粳米	精米
	マン	マン	マン
Pabna	68,300	11,700	0
Goalpara	60,300	6,200	0
Rangpur(local)	1,600	19,700	0
Faridpur	10,200	2,900	0
Nowgong	0	0	9,000
Sibsagor	0	0	4,800
Calcutta	2,200	0	400
Lakhimpur	0	0	3,300
Other districts	3,300	4,500	1,100
Total	145,900	45,000	18,600

ジャルパイグリ県・コッチビハール県は、どちらも、少量の米を輸入している。ジャルパイグリ県は精米 2,600 マン、粳米 1,000 マンを輸入し、コッチビハール県は精米 7,700 マン、粳米 1,600 マンを輸入した。主な供給県はパブナ県、ダッカ県であった。

マルダ県は、ベンガル州よりビハール州、北西諸州により多くの米を輸出しており、ガンジス中・上流域との経済的關係が濃い。1876 年の総輸出货量は精米 500,500 マン、粳米 96,900 マン、合計（精）561,063 マンだが、精米輸出は、北西諸州 150,900 マン（30.1%）、ビハール州 199,800 マン（39.9%）、ベンガル州 149,800 マン（29.9%）であった。とはいえ、ビハール州に向かった精米の 42%は最終的にはコルカタに還流した。即ち、サヘーブガンジへ輸出した米の内 83,900 マンは鉄道でコルカタに再輸出されたのである。マルダ米の主な輸出市場はハイイ

エットプル Hyetpur (105,900 マン) とロカンプル Rokunpur (181,200 マン) であり、主な輸出先はサンタル・パルガナ、コルカタ、ベナレス、パトナ、レヴェルガンジ、ガジプルである。パトナ向けは粳米が多く、その他へは精米が多い。

ボグラ県は高品質な米の産地として有名であり、精米 584,000 マン、粳米 46,100 マン、合計(精) 612,813 マンを輸出した。ヒッリー Hilli が 359,600 マン(全量の 61.5%)を扱い、飛び抜けて大きい市場であった。次いでドゥープチャンチア Dhupchanchia 62,300 マンであり、ボグラ Bogra、シェルプル Sherpur、シーブガンジ Sibganj はそれほど多くない。

ヒッリーからの輸出のうち 337,000 マン(93.9%)はフーグリ県に向かい、次いで、コルカタ向け 18,900 マン(5.3%)であった。ドゥープチャンチアからの輸出では、ゴアランドーに 21,600 マン(34.7%)、コルカタに 18,300 マン(29.4%)、チャンドルナガルに 11,000 マン(17.7%)が送られた。

ボグラ県から輸出された精米の行く先は、フーグリ県精米 349,000 マン、粳米 6,700 マン、ファリドプル県精米 109,800 マン、粳米 8,400 マン、パブナ県精米 64,200 マン、粳米 12,100 マン、コルカタ精米 41,200 マン、ナディア県精米 7,900 マン、粳米 13,400 マン、パトナ県精米 7,100 マン、粳米 200 マンであり、ダッカ県は、精米 200 マン、粳米 5,100 マンと少ない。ボグラ米の多くは、ナディア県の河川を下り、チャンドルナガルを経て、コルカタに再輸出される。輸送は雨季に行われる。

ラージシャーヒー県からの輸出は、精米 899,700 マン、粳米 394,500 マン、合計(精) 1,146,263 マンであり、ナウゴング(ガンジャ ganja 栽培の中心地でもある)が主要輸出市場であった。ナウゴングからの精米輸出先はゴアランドー 207,600 マン、クマルカリ Kumarkhali 65,600 マン、チャンドルナガル 19,600 マン、ドガッチ Dogachi (パブナ県) 16,700 マン、パトナ 11,500 マンであった。

ナウゴングからの輸出は精米 414,300 マン、粳米 25,900 マン、ラムブル バウリア Rampore Bauleah から精米 106,800 マン、粳米 1,100 マンであった。行く先は、ファリドプル県精米 401,000 マン、粳米 58,900 マン、ナディア県精米 246,700 マン、粳米 193,400 マン、パブナ県精米 45,800 マン、粳米 94,800 マン、パトナ県精米 66,900 マン、粳米 4,000 マン、コルカタ精米 61,200 マン、粳米 1,000 マン、フーグリ県精米 26,100 マン、ダッカ県精米 4,600 マン、粳米 35,100 マンという順番であった。

ラージシャーヒー県からナディア、ファリドプル両県へ精米が大量に輸出され、ナディア県内のクシュティア(147,100 マン)、クマルカリ(67,400 マン)、ファリドプル県内のゴアランドー(375,800 マン)の3つの鉄道駅からコルカタに再輸出された。ラージシャーヒー県からは東ベンガル鉄道による輸送が多い。カリガンジ Kaliganj からの粳米輸出はナディア県のガンジス沿いのゴールバタン Goalbathan に送られる。ビハール州、北西諸州にも相当量が行く。

パブナ県の米の輸出入は全体規模ではそれほど大きいとはいえないが、その流れは複雑であり、東ベンガルで最も重要な中継市場の一つシラージガンジを中心として、東ベンガ

ル、コルカタ、北部ベンガル、ビハール州につながり、さらに、アッサム諸県に 20 万マツを
超す大量の精米を供給していた。そこで、やや詳しくこの県を中心とする米の流れを追っ
てみよう。

パブナ県は、下掲表に見られるように、全体として米を合計（精）で 696,950 マツ²²を輸出
し、556,500 マツを輸入したから、取引において 140,450 マツの輸出超過県であった。輸出はナ
ディア県に精米 65,300 マツ、粳米 20,200 マツ、コルカタに精米 101,300 マツ、ファリドプル県
に精米 245,700 マツ、粳米 24,300 マツ、ダッカ県に精米 6,100 マツ、粳米 14,000 マツ、ラングブ
ル県に精米 6,900 マツ、粳米 500 マツ、アッサム諸県に精米 216,100 マツ（シーブサガル県精米
56,600 マツ、ラッキムプル県精米 50,300 マツ、ゴアルパラ県精米 40,900 マツ、ダラン県精米 25,600
マツ、ナウゴン県精米 20,400 マツ、カムルプル県精米 11,800 マツ、ガウハティ 10,500 マツ）、コ
ッチビハール藩王国に精米 4,300 マツ、粳米 700 マツ、ビハール州パトナ県に精米 11,600 マツ、
その他諸県に精米 700 マツ、粳米 2,700 マツであった。パブナ県ではシラージガンジが最大の
輸出市場で、精米 350,300 粳米 82,300 マツ、次いで、パブナ精米 9,800 マツ、粳米 42,600 マツ
であった。

これらのうち、ナディア県の中継市場クシュティアへ精米 57,400 マツ、ファリドプル県の
中継市場ゴアランドーへ精米 234,000 マツが輸出されたが、それらの大きな部分はコルカタ
へ再輸出された。また、アッサム諸県へ輸出された精米は茶園労働者（coolies）へ供給さ
れた。

輸入はマイマンシン県から精米 178,100 マツ、粳米 78,000 マツ、ラージシャーヒー県から精
米 45,800 マツ、粳米 94,800 マツ、ラングプル県から精米 68,300 マツ、粳米 11,700 マツ、ボグラ
県から精米 64,200 マツ、粳米 12,100 マツ、ディナジプル県から精米 9,900 マツ、粳米 1,500 マツ
などであった。

上述のように、パブナ県の主要市場はシラージガンジであり、米取引のみに限っていつ
ても、輸入は精米 350,300 マツ、粳米 82,300 マツ合計（精）411,738 マツ、輸出は精米 342,100
マツ、粳米 2,700 マツ合計（精）343,788 マツに達した。シラージガンジへの輸入先は、マイマン
シン県 177,800 マツ、ラングプル県 67,200 マツ、ボグラ県 63,500 マツ、ラージシャーヒー県 10,900
マツなどであり、他方、輸出先はシーブサガル県 Sibsagar 56,600 マツ、ラッキムプル県
Lakhimpur 50,300 マツ、ゴアルパラ県 38,700 マツ、ダラン県 Darrang 25,600 マツ、ナウゴン
県 Nowgong 20,400 マツ、ゴウハティ県 Gowhatti 10,500 マツ、ファリドプル県 15,100 マツ（そ
の内、ゴアランドー 14,900 マツ）、コルカタ 92,000 マツ、パトナ県 11,600 マツなどある。アッサ
ム諸県への米輸出のほとんど全てが、シラージガンジから送られたことになる。シラージ
ガンジへの輸入は全て現地船により、輸出は鉄道によるもの精米 66,200 マツ、蒸気船による
もの精米 164,000 マツ、現地船によるもの精米 111,900 マツ、粳米 2,700 マツであった。この中
で、アッサム諸県への輸出においては蒸気船の占める割合が高かった。

パブナ県の米取引

²² ただし、パブナ県内の域内輸出分である精米 15,100 マツ、粳米 18,000 マツ、合計 26350 マツを差し引いた。

	輸入			輸出		
	精米	粳米	合計 (精)	精米	粳米	合計 (精)
	マン	マン	マン	マン	マン	マン
現地船	403,100	245,500	556,500	442,900	80,300	493,100
蒸気船	0	0	0	245,500	556,500	164,000
鉄道	0	0	0	66,200	0	66,200
計	403,100	245,500	556,500	673,100	80,300	723,300

ムルシダバード県は、精米換算で 100 万マンを超える米の大輸出県であった。主要な米輸出市場はジャンギプル Jangipur 精米 225,900 マン、ムルシダバード精米 184,500 マン、ナルハティ Nalhatti 精米 140,400 マン、ムラーリ Murari 精米 139,600 マン、ドリアン Dhulian 精米 135,500 マン、ラムプルハット Rampur Hat 精米 114,300 マンなどであり、輸出先はコルカタ精米 842,700 マンの他は、ビハール州のサルン県精米 90,400 マン、ガジプル県精米 44,400 マン、パトナ県精米 18,000 マンなどであった。精米の 80%弱はコルカタに向かい、ガンジス上流域へは合計で約 20 万マン (19%弱) が輸出されたことになる。鉄道で運ばれた精米 43.8 万マンは全てコルカタへ向かったが、1875 年には 308,691 マンに達したビハール州への米の鉄道による輸出は物流記録システムから洩れている。従って、ガンジス上流域への輸出は、上記数値よりはるかに大きかったと思われる。ムガル時代における北インドとベンガルをつなぐ商業都市としてのムルシダバードの機能とそのネットワークは 19 世紀後半に至ってもなお消滅していなかったといえよう。

ムルシダバードの米取引

	輸出		
	精米 (マン)	粳米 (マン)	合計 (精)
現地船	624,200	7,300	628,800
鉄道	437,700	0	437,700
	1,061,900	7,300	1,066,500

ナディア県はその特異な地理的条件に制約され、県内の米の生産量では住民の消費を賄えず、恒常的な米の輸入県であった。輸入は河川を主として行われ 795,300 マン (精米 445,800 マン、粳米 559,100 マン) に達した。輸出は鉄道 (精米 179,100 マン) と河川 (精米 291,900 マン) によって行われ、精米 475,600 マンであった。従って、輸入超過は 319,700 マンであった。この県の米取引量は、他県産米が現地船によって大中継市場であるクシュティア駅に運ばれ、そこから鉄道でコルカタに再輸出されるというルートによって拡大しているが、これはナディア米の輸出とは別の事柄である。なお、ナディア県産米の県内米取引量は、精米 6,000 マン、粳米 28,600 マンであった。

ナディア県への米供給は、ラージシャーヒー県から精米 246,700 マン、粳米 193,400 マン、合計 (精) 477,118 マン、パプナ県から精米 65,300 マン、粳米 20,200 マン、合計 (精) 131,906 マン、ジェショール県から精米 300 マン、粳米 124,600 マン、合計 (精) 78,175 マン、24-パルガ

ナ県から精米 1,100 マン、粳米 76,100 マン、合計 (精) 48,663 マン、バルドマン県から精米 42,300 マン、粳米 3,700 マン、合計 (精) 44,613 マン、ダッカ県から精米 1,100 マン粳米 58,700 マン、合計 (精) 37,788 マン、ディナジプル県から精米 19,000 マン、粳米 3,400 マン、合計 (精) 21,125 マン、ボグラ県から精米 7,900 マン、粳米 13,400 マン、合計 (精) 16,275 マン、コルカタから精米 5,200 マン、粳米 21,000 マン、合計 (精) 18,325 マンであった。

米の輸入市場はクシュティア精米 253,700 マン、粳米 95,000 マン、合計 (精) 313,075 マン、クマルカリ精米 91,500 マン、粳米 23,600 マン、合計 (精) 106,250 マン、ゴールバタン粳米 121,100 マン (精米換算 75,688 マン)、キシエンガンジ粳米 53,000 マン (精米換算 33,125 マン) などであった。最大の輸入市場であるクシュティアへの供給はラージシャーヒー県から精米 147,100 マン、パプナ県から精米 57,400 マン、などで合計 (精) 313,100 マンであった。

ナディア県へのジェショール県からの大量の粳米の輸入は注目される。『年次報告 (1876 年)』から引用しよう。「大量の労働者がナディア県からシュンドルバンに米の刈入れに移動し、賃金の一部を現物で貰う。従って、各労働者はそれぞれ数マンの粳米を持って帰る。個々の輸入量は小さいが、総量としては相当に大量になる。それは、物流記録報告に記されている量をはるかに上回るであろう。」²³

ナディア県からの米の鉄道による輸出はすべてコルカタに行く。クシュティア駅から精米 236,363 マン、次いで、クマルカリ駅から精米 42,703 マン、チョグダー駅から精米 6,382 マンなど合計 291,877 マンであった。この年の鉄道輸出は、マドラス飢饉によりコルカタ港からの精米輸出が拡大したので、例年になく大きかった。河川による輸出は相対的に小さく、シャンティプル Santipur から精米 55,200 マン、コクサ ジャニプル Khoksa Janipur から精米 20,400 マン、ハンスカリ Hanskhalli から精米 18,100 マン、粳米 700 マン、合計(精)18,538 マン、クマルカリから精米 12,800 マン、チョグダーから精米 11,900 マン、ラナガッタ Ranaghat から精米 9,800 マン、ボシントプル Boshuntpur から粳米 17,500 マンなどで、合計すると精米 159,400 マン、粳米 31,500、合計 (精) 179,088 マンであった。輸出先はコルカタに精米 148,500 マン、粳米 1,100 マン、合計 (精) 149,188 マン、ナディア県(域内)に精米 6,000 マン、粳米 28,600 マン、合計 (精) 23,875 マン、カッチャル県 Cachar に精米 2,300 マン、その他諸県に精米 2,600 マン、粳米 1,800 マン、合計 (精) 3,725 マンであった。

ファリドプル県にある東ベンガル鉄道の終着駅ゴアランドーには百万マンを超える精米が入荷し、東ベンガル鉄道や船でコルカタに再輸出される。1876 年度に記録された輸入・輸出総量は下表の如くであった。

ファリドプル県の米取引

	輸入			輸出		
	精米	粳米	合計 (精)	精米	粳米	合計 (精)
		マン	マン	マン	マン	マン
現地船	947,800	287,000	1,127,200	426,700	12,600	434,600

²³ 『年次報告書 (1876 年)』、パラ 105、41 頁。

蒸気船				20,900		20,900
鉄道				577,200		577,200
計	947,800	287,000	1,127,200	1,024,800	12,600	1,032,700

総輸入量 1127200 マン、総輸出量 1032700 マンであり、その差（入超）の 94,500 マンが県内の消費必要量の不足分に充当された。県北部では米不足が生じるが、南部では剰余米が発生する。

輸入米の 94%はゴアランドーに入荷し、次いで、ファリドプル、パングシャ、バンガ Bhangra、モドゥカリ Modhukhali、アームバリア Ambaria などの市場が続く。供給はラーヂシャーヒー県から精米 401,000 マン、粳米 58,900 マン、合計（精）43,782 マン、パプナ県から精米 245,700 マン、粳米 24,300 マン、合計（精）260,888 マン、ボグラ県から精米 109,800 マン、粳米 8,400 マン、合計（精）115,050 マン、ディナジプル県から精米 87,000 マン、粳米 1,600 マン、合計（精）88,000 マン、マイマンシン県から 20,100 マン、粳米 59,300 マン、合計（精）571,625 マン、ジョショール県から精米 1,000 マン、粳米 81,400 マン、合計（精）51,875 マン、ティッペラ県から精米 43,200 マン、粳米 10,000 マン、合計（精）49,450 マン、ダッカ県から精米 20,000 マン、粳米 8,600 マン、合計（精）25,375 マン、シレット県から精米 3,500 マン、粳米 18,200 マン、合計（精）18,234 マン、ラングプル県から精米 10,200 マン、粳米 2,900 マン、合計（精）12,013 マン、24-パルガナ県から粳米 12,200 マン（精米換算 7,625 マン）であった。ファリドプル県内で生産され、流通し、消費された域内流通量は精米 3,600 マン、粳米 200 マン、合計（精）3,725 マンであった。

ゴアランドーに到着する米の輸出市場は、ラーヂシャーヒー県のノウゴングが最大で、次いでパプナ県のベラ Bera、ディナジプル県のシーブガンジと続いた。

ゴアランドーからコルカタに東ベンガル鉄道で精米 576,300 マンが運ばれる。その他にはベルガッチ Belgachi、ラーヂバリ Rajbari、パングシャの 3 駅から精米 950 マンがコルカタに輸送された。

ゴアランドーから現地船で 44,600 マン（精米と粳米合わせて）が運ばれたが、その内訳はゴアルパラ県に 28,600 マン、パプナ県に 4,900 マン、その他の県に 11,100 マンであり、その他に蒸気船が 20,900 マンをアッサム諸県に輸送した。

ファリドプル県からの米の水上輸送量は 9 市場から合計 447,600 マンに達し、輸出先はコルカタに精米 356,100 マン（79.6%）、ダッカ県に精米 12,700 マン（2.8%）、アッサムのゴアルパラ県に精米 29,700 マン（6.6%）、ラッキムプル県に精米 19,300 マン（4.3%）であった。

ダッカ県の米貿易は例外的であり、ベンガル州内でほとんど唯一の明白な米不足県である²⁴。下表に明らかなように、輸入は 1,862,075 マン（精米換算）、輸出は 1,182,200 マン（精米換算）であったから、入超量は精米換算 679,900 マンであった。輸入米の大半は人口過密なムンシガンジ（1872 年の人口センサスで 1 平方哩当たり 1,031 人）に運ばれた。

²⁴ 私はかつてダッカ県が米不足県であるという通説に疑問を呈したが、少なくとも、1876 年については、自説を修正し、通説を受け入れることにしたい。『地域構造III-2』132-133 頁。

ダッカ県の米取引

	輸入				輸出			
	現地船	蒸気船	鉄道	計	現地船	蒸気船	鉄道	計
	マン	マン	マン	マン	マン	マン	マン	マン
粳米	1,804,600			1,862,100	185,500			1,182,200
精米	734,200				531,400	122,500	412,400	

ダッカ県の輸入市場は下表の如くであり、ナラヨンガンジとダッカ市が飛び抜けて大きい。この特徴は粳米の形態での輸入が多いことである。その理由については、明確な記述を見出せないが、先述したジョジョール県についての記述が、ダッカに粳米の形態で大量の米を供給するマイマンシン県、シレット県、ティッペラ県にも妥当すると考えられる。

ダッカ県内の米輸入市場

輸入市場		
	精米 (マン)	粳米 (マン)
Narayanganj	578,900	393,700
Dacca	42,300	518,400
Modunganj	86,400	245,400
Lohajang		195,600
Mirpur		76,900
Kolakopa	1,400	48,900
Srinagar		43,700
Sabhar		23,500
Manikganj	500	13,600
Bohur		13,200
Mirkadim		10,100
Small marts	24,700	221,600
Total	734,200	1,804,600

ダッカ県への米の供給県

供給県	精米	粳米
Mymensingh	304,100	986,600
Tipperah	278,900	250,800
Sylhet	62,800	375,700
Dacca (Local)	47,900	45,700
Bakarganj	12,900	12,900
Jessore	300	59,000

Rajshahi	4,600	35,100
Faridpur	12,700	4,200
Pabna	6,100	14,000
Other districts	3,900	20,600
Total	734,200	1,804,600

ダッカから輸出される米の市場は、ナラヨンガンジ (64.9%)、ダッカ市、モドゥガンジ、サトゥリアなどであり、輸出先はコルカタが最大 (73.8%) であり、次いで、近隣諸県 (チッタゴン、ダッカ、ファリドプル)、アッサム諸県 (シレット、ゴアルパラ、カムルーパ)、ビハール州パトナ県などであった。

ナラヨンガンジとダッカの両市場の貿易構造は、大量に輸入し、大量に再輸出するこの県の特異性を示している。

ナラヨンガンジ市場への米の輸入構造をみると、主にティッペラ県その他の 6 県から精米 578,900 マン、粳米 393,700、合計 (精) 824,963 マンが輸入されており、ダッカ市場には、主にマイマンシン県他の 4 県から精米 42,300 マン、粳米 518,400 マン、合計 (精) 366,300 マンが輸入された。ダッカ、ナラヨンガンジの両市場への米の供給は、マイマンシン、ティッペラ、シレット各県が大きな割合を占めている。ダッカ市場への輸入部分の内、実に 88.5% が粳米であることは、マイマンシン県からの輸入が多いことによって説明されるし、また、精米加工のためのかなりの雇用がダッカ市場近辺で創出されたであろうことを示唆する。

そして、両市場からの輸出構造を見ると、ナラヨンガンジ市場からは精米 692,000 マン、粳米 3,8900 マン、合計 (精) 716,313 マン、ダッカ市場からは精米 133,700 マン、粳米 5,300 マン、合計 (精) 137,013 マンが輸出された。ナラヨンガンジ市場からは、輸入された米の 86.8% が域外に再輸出されたが、ダッカ市場から再輸出されたのは 37.4% に留まり、後者にとってはダッカ市内やダッカ県内 (恐らく Bikrampur 地域) への供給量が大きいことを示唆している。ナラヨンガンジからは 86.8% がコルカタに向かい、ダッカからは 70.6% がコルカタに向かった。輸出先の多様性においてはダッカ市場のほうが豊かであり、29.4% がアッサム州のカムルーパ、ゴアールパラ、ビハールのパトナなどに輸出されたのである。こうした輸出先の違いは、両市場で活動する商人の構成が異なっているかもしれないことを示唆している。

ティッペラ県は、大きな米輸出県であり、精米 907,600 マン、粳米 279,700 マン、合計 (精) 1,082,413 マンを輸出した。ゴウリプルが飛びぬけて大きい米の輸出市場であり、次いで、フアンドック Fandock、パンチプカリア Panchpukharia などが大きい。輸出先はコルカタ (精米換算 460,600 マン) とダッカ県 (精米換算 435,650 マン) が主で、この両者で 82.8% を占めた。

マイマンシン県は、大量の米輸出を行う。県東部からダッカ県へ向かう流れが最も大きい。輸出総量は、精米 726,200 マン、粳米 1,212,800 マン、合計 (精) 1,484,200 マンである。米輸出市場ではカリガンジ Kaliganj とハルワガタ Halwaghat が大きい。輸出は、ダッカ県

が全体の62%を占め、次いで、パブナ15.2%、コルカタ9%、ファリドプル3.9%、マイマンシン（域内）3.6%各県である。この県の輸出米の過半が粳米であり、ジェシヨール県と共に例外的である。

この県は96,900マンの米をティッペラ(55,100マン)、ダッカ(12,900マン)、シレット(11,400マン)など各県から輸入し、また、県内で生産され、流通し、消費される域内流通米が54,100マんに達する。県内最大の米輸入市場はボイラブバザルであり、輸入米の81.8%を扱う。

ノアカリ県からの輸出は、精米751,000マン、粳米42,500マン、合計(精)777,600マンである。主要輸出市場では、小フェニ河 Little Fenny River111,900マン、タルトゥリ Taltulli77,300マン、ツカタカリ Tukhatakhalli71,500マンなどが大きい。輸出先は、チタゴン県が658,200(84.6%)と圧倒的に大きく、次いで、コルカタ118,500マン(15.2%)であり、両者で99.8%を占める。

チッタゴン県の米輸入は主に再輸出を目的としており、精米696,200マンがモウリシャス、コーチン、セイロンその他に出て行く。供給県は、ノアカリ県658,200マン、ダッカ県106,000マン、ティッペラ県28,500マン、チッタゴン県(域内)28,100マンなどであった。

過去2～3年、チッタゴン県からの精米輸出は大幅に減少している。例えば、1871年150万マン、1872年輸出量280万マン(史上最高)だったが、1876年にはサイクロン被害により輸出が激減し70万マン弱になった。

ベンガルと周辺諸地域(ビハール州、オリッサ州、アッサム州、北西諸州、ネパール)との間の米の流通について纏めて見ることにしよう。

ビハール州の主食は米であり、通常の農民は食事の半分は米、他の半分は豆類を食べる。だが、サルン県では貧困層は玉蜀黍、大麦を食べる。ベンガルからビハール諸県に大量の米が輸出されている。

下表はビハール州の米貿易の全体像を示す。

	輸入			輸出		
	精米 マン	粳米 マン	合計(精) マン	精米 マン	粳米 マン	合計(精) マン
現地船	1,332,300	379,600	1,569,500	633,500	60,400	671,300
道路	307,100	325,100	510,200	61,800	12,400	69,500
鉄道	記録なし	記録なし	記録なし	548,900	0	548,900
合計	1,639,400	704,700	2,079,700	1,244,200	72,800	1,289,700
州内貿易 の控除	512,800	60,700	550,700	512,800	60,700	550,700
純合計	1,126,600	644,000	1,529,000	731,400	12,100	739,000

この表より、1876年度のビハール州の米の純輸入量(精米換算)は79万マンである。

河川輸送記録によれば、ベンガル州からビハール州への輸入は、州内貿易を除くと、河川による輸入は、精米865,800マン、粳米321,300マン、合計(精)1,066,600マンであり、河川による輸出は、精米167,000マン、粳米2,100マン、合計(精)168,300マンであった。

ビハール州の米の輸入県は、パトナ438,900マン(41.1%)、サルン408,900マン(38.3%)、

サントラル パルガナ 87,900 マン (8.2%)、ダルバンガ 51,400 (4.8%) などであった。これらに米を供給していた諸県は、ベンガル州のマルダ 254,500 マン (23.9%)、ディナジプル 162,500 マン (15.2%)、ムルシダバード 134,600 マン (12.6%)、ラージシャーヒー 85,900 (8.1%)、ダッカ 41,700 マン (3.9%) などと北西諸州のゴラクプル 169,800 マン (15.9%)、バスティ 72,400 マン (6.8%) などであった。ベンガル州がビハール州の米の不足分の 3 分の 2 を供給していたことになる。

輸入市場としては、パトナ市、レヴェルガンジ (サルン県)、サヘーブガンジ (サントラル パルガナ) が主要であった。パトナに輸入された精米は 325,400 マンで、その内ムルシダバード県から 83,800 マン、マルダ県から 51,800 マン、ディナジプル県から 28,700 マン、北西諸州のバスティ県から 6,900 マンであった。サヘーブガンジに輸入された精米は 85,600 マンで、その 72.4% はマルダ県から来ている。ここへの粳米輸入は 3,600 マンでマルダ県から供給された。

ビハール州からの米輸出は 168,300 マンと少なく、そのうち 108,000 マン (64.2%) はコルカタに集中し、その他では北西諸州のガジプル県に 21,800 マン、ベンガル州のフーグリ県に 17,100 マンが運ばれた。ビハール州からの主要な米輸出市場はバガルプル 62,000 マン、パトナ 35,800 マン、モンギール 29,600 マン、プラニア 22,800 マンであった。

ビハール州内の米取引も相当量に達するが、それらは主に州北部・東北部の低地から人口周密なサルン県、ティルフト県南部に陸路運ばれるというものであった。州内の陸路貿易の記録はないが、河川輸送の記録は取られている。精米の総輸出量 502,971 マンの行く先は、パトナ 202,854 マン、プラニア 74,380 マン、バガルプル 58,860 マン、サルン 53,572 マン、モンギール 50,770 マンの各県であった。ビハール州の河川輸送の主要部分は、パトナ、サルン両県からモザファルプル県への米輸出であった²⁵。しかし、パトナ、サルン両県は他県から米を輸入していたから、ここには再輸出の米も入っていたであろう。プラニア県からサントラル パルガナ県への米輸出も大きいし、プラニア、バガルプル、モンギール各県からサルン県への米の流れもある。主要な輸入市場はレヴェルガンジとパトナである。

パトナ県とガヤ県の間での米の陸路輸送は完全に域内取引であり、ジェハナバード Jehanabad で記録されたのは精米 46,300 マン、粳米 1,300 マン、合計 (精) 47,113 マンであった。ガヤからパトナへの流れの方が、その反対方向の流れより大きい。

ネパールとビハール州の米輸送は陸路で行われる。ネパールから精米 260,800 マン、粳米 323,800、合計 (精) 463,175 マンがビハール州に輸出され、モザッファルプル、チャムパラン、プラニア、ダルバンガ、サルン、バガルプルなどの各県に運ばれた。ビハール州からの逆の流れは精米 15,500 マン、粳米 11,100 マン、合計 (精) 22,438 マンと小さかった。従って、ビハール州はネパールに対し精米 245,300 マン、粳米 312,700 マン、合計 (精) 440,738 マンの入超であった。

鉄道による米の輸出は殆どがコルカタに向かい、その量は 549,000 マン (サントラル パル

²⁵ 『年次報告書 (1876 年)』、49 頁、パラ 144 の表より。

ガナ県から 246,400 マン、バガルプル県から 153,000 マン、パトナ県から 83,000 マン、モンギール県から 60,100 マン、シャーハーバード県から 3,300 マン、プラニア県から 3,200 マン) に達した。しかしこれは南インドの飢饉による強い需要があった為に生じた再輸出目的の特殊な物流であった。鉄道によるビハール州の米取引では輸入が輸出を上回り、主な供給県はベンガル州のバルドマン、ビルブーム、ムルシダバードであった。

チョタ ナグプル地方からの米の輸出は少量であり、ここでは物資は依然として主に陸路を牛の背で運ばれた。

オリッサ州は、大きな精米の輸出州であった。運輸手段が整備されたので、輸出が急速に拡大し、1876 年のマドラスへの米輸出は史上最大を記録したが、マドラス、ボンベイの飢饉による緊急需要が大きかったように思われるので、これが安定した傾向といえるのかは確かではない。

オリッサ州から陸路マドラスに向かう精米はルムバ **Rumbha** の境界関所で記録されており、416,600 マンに達した。殆どすべてプーリー産米であった。

	Balassor 県 マン	Cuttack 県 マン	Puri 県 マン	Total マン
海外	97,187	241,173	44,343	382,703
マドラスと英領インド	973,856	501,779	663,041	2,138,676
コルカタとベンガル管区	436,720	843	0	437,563
合計	1,507,763	743,795	707,384	2,958,942

北西諸州は米の純輸入地帯であり、ガジプル県が最大の輸入地であった。ベンガル州のビハール州隣接諸県から輸入された。しかし、アワドは米剰余県で 60,000 マンがビハール州に輸出された。

北西諸州の純輸入は 472,100 マンで純輸出は 347,800 マンだから、124,300 マンの入超であった。1876 年度のベンガル州からの輸入は 433,043 マン (ディナジプル県から 185,569 マン、マルダ県から 154,285 マン、ムルシダバード県から 60,406 マン、ラージシャーヒー県から 24,520 マン、ダッカ県から 3,435 マン、パプナ県 1,275 マン、その他 3,553 マンであった。行く先は、ガジプル県 298,108 マン、ベナレス県 62,553 マン、ゴラクプル県 28,252 マン、アジムガル県 25,097 マンであった。北西諸州からビハール州 (主に、サルンとパトナ両県) への輸出は 334,837 マンであり、その他を含めると 347,782 マンに達した。北西諸州の域内米取引は 174,640 マンであり、記録された輸出は 522,400 マンであった。

アッサム州は、大規模な米の輸出入はないが、傾向的には輸入が上回る。茶園労働者は輸入米に依存しており、それらはシラージガンジ、ダッカから現地船や河蒸気船で運ばれた。これはアッサムの米不足からではなく、外来労働者がアッサム米に対して偏見を持っていたからである。山岳部への陸路輸入もあるがこれらは記録されていない。カーシー山脈はマイマンシン、シレット両県から米を輸入した。ある推定によればこれは年間 4~50 万マンに達するという。ガロ山地では、米はほぼ自足しているが、欠乏時のみマイマンシン

県やゴアルパラ県から輸入する。シレットは米剰余県であり、北のアッサム茶園、東のカチャル県に輸出される。また、鉄道でダッカを経てコルカタにも供給している。カチャル県はシレット県から 20~30 万マンを輸入するようであるが、記録は残っていない。

ベンガル州からアッサム州への輸送は、現地船で 326,300 マン、蒸気船で 212,700 マン、合計 539,000 マンであり、逆にアッサム州からベンガル州へは 489,900 マンが輸出された。

アッサム州の米輸入は、ゴアルパラ県に 177,500 マン、シレット県に 83,400 マン、ラッキムプル県に 78,700 マン、シーブサガル県に 68,300 マン、カムルプ県に 38,500 マン、ダラン県に 30,900 マン、カチャル県に 15,300 マンであった。アッサムへの供給県は、パブナ県 210,100 マン、ラングプル県 79,500 マン、ファリドプル県 55,100 マン、マイマンシン県 45,800 マンであった。

主要な米輸出市場は 7 ヶ所ですべてシレット県内にあるそれらの市場からの輸出量は精米 214,800 マン、粳米 433,100 マン、合計（精）485,488 マンであり、輸出先はダッカに 62,800 マン、粳米 375,700 マン、合計（精）297,613 マン、コルカタに精米 121,000 マン、粳米 2,500 マン、合計（精）122,563 マンであった。

2 ジュート

ジュートを栽培し、製品の運搬用のジュート袋（gunny bags）を製造することは古くから行われてきたが、ジュート耕作が拡大し、原料ジュートの輸出が伸びたのは 19 世紀後半以降である。1828~33 年のコルカタからの平均輸出量は 11,800cwts.²⁶であったが、1838~43 年には 117,047cwts.になり、さらに、1848~53 年には 439,350cwts.、1858~63 年には 969,724cwts.へと急増した。1876 年の直前の 5 年間の輸出量は次の表が示す。

	Cwts.	マン	ルピー
1872 年度	7,061,951	11,612,084	41,279,439
1873 年度	6,126,120	8,338,329	34,355,139
1874 年度	5,499,788	7,485,822	32,449,941
1875 年度	5,206,521	7,086,853	28,052,933
1876 年度	4,574,097	6,225,852	26,648,844

原料ジュートの輸出は 1872 年度に頂点に達したが、その後、落ちている。これは、ベンガル、特にコルカタ圏内にジュート工場が増加し、域内の原料ジュート需要が拡大したからである。従って、原料ジュート輸出の減少はジュート製品輸出の拡大で補われた。コルカタのジュート工場の原料ジュート消費量は、75 年度には 220 万マンと推定されているのである。

75 年度はインド国内に発生した飢饉のために穀物輸送用ジュート袋の需要が高まり、原料ジュートが不足した。その結果、東ベンガルのジュート大集積地シラーズガンジなどの原料ジュート価格が高騰し、品不足もあり、上掲表に示される様にヨーロッパへの輸出が

²⁶ 1cwt.は、英国では 112 ポンド（約 50.8kg）。

一層落ち込んだのである。

ジュートの生育時期は夏米 (aus) と重なり、3月末～6月初に種子を播き、8月中頃～10月中頃に刈る。平均収量は18マ/ヘーカである。

「ジュートが処理されると、農民はその繊維の束を…最寄りの市場に運び、零細商人に売る。後者はジュートをより大きな商人に売る。また、零細商人は現金を持って家々を回り、ジュート繊維を買い付け、自分で売るか、あるいは、手付金を受け取った商人に引き渡す。これらの行商人はジュートを大量に生産する全ての県で見られ、ジュート農民と商人の間に介在する。」

シラージガンジにおけるジュート取引の状況を示す次の記述は、他の農村市場でも、多少の違いはあれ、妥当する。「ジュートの束は近くの村の市場hatで行商人bepariに売る。彼らは50～150マ積みの船で輸出港に運び、そこに店を構える商人mahajanに売る。行商人は、5%の手数料をとってマハジャンの指令により集荷し引き渡す場合もあるし、マハジャンに売る場合もある。」²⁷

原料ジュートの68.5%は現地船でコルカタに運ばれたが、鉄道(25.3%)、蒸気船(4.4%)、陸路(1.8%)も用いられた。

ダッカ県ナラヨンガンジやマイマンシン県スバルナカリ Subarnakhali にはジュート圧搾所があり、そこでは梱 (bale) にして送る。だが、大半の原料ジュートは束状やドラム状でコルカタに到着し、海外に輸出される分はコルカタ近辺の圧搾所で本梱にされた。

このように、各県で生産されたジュートは地方の大商業中心地に送られ、さらにそこから現地船、鉄道や蒸気船などでコルカタに再輸送されたのだが、そのようなセンターとして東ベンガルのシラージガンジ、ナラヨンガンジ、ゴアランドーと中部ベンガルのクシュティアが特に有名である。

シラージガンジはベンガル最大のジュート市場である。輸入量は、1876～77年に1,792,536マで、その主な供給県はラングプル 830,600マ、マイマンシン 293,900マ、ボグラ 209,300マ、コッチビハール 159,800マ、パブナ 134,200マ、ゴアルパラ 97,600マ、ジャルパイグリ 44,400マ、ラーシシャーヒー 20,100マ、その他 2,600マである。他方、同市場からの輸出量は202.5万マであった。シラージガンジにあるジュート工場が約10万マを消費するから、結局30万マ以上が不足するが、これは近隣のパブナ、ボグラ両県から陸路、運河、水路などで運ばれた物流統計には記録されないジュートによって埋められた。このシラージガンジを経由する東ベンガル鉄道と河川会社 River Company の蒸気船は全てコルカタに向かう。現地船は993,654マを輸出したが、その内893,417マはコルカタに直接に向かい、92,912マはゴアランドー、7,325マはクシュティアに運ばれ、それぞれの駅から鉄道でコルカタに向かった。

ナラヨンガンジは、ベンガル第2のジュート市場である。輸入はすべて現地船で運ばれ

²⁷ これは、Kerrのジュート委員会報告から採られた文章である。谷口「地域構造 (II)」pp.67～8を参照。

1,294,839 マンに達し、輸出は現地船 565,051 マン、東ベンガル鉄道 669,896 マン、蒸気船 358,731 マンであり合計 1,594,278 マンであった。輸入は、マイマンシン県から 517,800 マン、ティッペラ県から 522,600 マン、ダッカ県から 197,100 マン、シレット県から 25,200 マン、その他 32,100 マン、合計、1,294,800 マンであった。約 30 万マンが不足するが、それは、ダッカ県内の地方的供給によって埋められた。輸出はほぼ全量コルカタに向い、鉄道、蒸気船で 102.5 万マン、現地船で 565,651 マンが運ばれた。

ゴアランドーへのジュート輸入は全て現地船で運ばれ 1,685,169 マンに達する。輸出は現地船 2,418 マン、東ベンガル鉄道 1,657,116 マンで合計 1,659,534 マンであり、殆どすべて鉄道で運ばれている。ここは東ベンガル鉄道の終着駅であり、かつジャムナ河とガンジス河という両大河の交差点にあり、北ベンガル・東ベンガルのジュート集荷地として最良の立地に恵まれている。輸入は、パブナ県から 594,100 マン、マイマンシン県から 572,000 マン、ラングプル県から 220,100 マン、ダッカ県から 162,600 マン、ボグラ県から 45,300 マン、ディナジプル県から 33,800 マン、ジャルパイグリ県から 23,100 マン、ラージシャーヒー県から 19,900 マン、ファリドプル県から 10,000 マン、その他 4,300 マンであった。

クシュティアはゴライ河の河口に立地し、ジュート輸入は現地船で行われ 99,127 マンに達した。輸出は現地船 355 マン、東ベンガル鉄道 123,370 マン、蒸気船 1,636 マン、計 125,361 マンである。輸入はパブナ県から 36,200 マン、ナディア県から 36,000 マン、ラージシャーヒー県から 11,300 マン、プラニア県から 5,700 マン、ディナジプル県から 3,700 マン、マルダ県から 3,200 マン、その他 3,000 マン、合計 99,100 マンであった。不足分 26,000 マンは、ナディア県の近隣諸村の生産物で、物流記録では捕捉されない。輸出は全量コルカタに向かう。

コルカタの 1876 年度のジュート輸入総量は 8,303,913 マンであった。運輸手段は、現地船 3,839,404 マン (46.2%)、陸路 224,274 マン (2.7%)、東ベンガル鉄道 3,382,406 マン (40.7%)、蒸気船 856,829 マン (10.3%) であった。コルカタから海外への輸出総量は 6,225,852 マンであり、入・出荷のピークは 9~10 月である。輸出入の差 210 万マンはコルカタとその近郊のジュート工場の消費量である²⁸。なお、コルカタへの入荷は、現地船による部分がもっとも多いが、順調に鉄道輸送が増加している。1875 年の洪水で鉄道の荷に被害が出たので、現地商人は鉄道に対して一時不信感を抱いたが、運賃を引き下げたことにより輸送量が再び増加したのである。

原料ジュートを加工してコルカタで 8,000~8,800 万枚のジュート袋が生産された。

現地船によってコルカタへジュートを輸出している諸県は、パブナ 1,085,700 マン、ダッカ 832,100 マン、マイマンシン 522,100 マン、ラージシャーヒー 344,200 マン、ファリドプル 309,900 マン、ディナジプル 200,500 マン、フーグリ 141,800 マン、ラングプル 86,000 マン、マルダ 67,300 マン、バカルガンジ 51,000 マン、ジェショール 49,100 マン、ナディア 37,500 マン、バルドマン 20,500 マン、ムルシダバード 20,300 マン、24-パルガナ 17,200 マン、ティッペラ 15,000

²⁸ 1876 年の時点で 4000 台のジュート織機loomがあり、各織機は年間で平均 55 マンを消費するから、原料消費量は最大 220 万マンとなる。

マ、ボグラ 10,700 マン、プラニア 10,700 マン、その他 17,800 マンであった。

東ベンガル鉄道によるジュート積出し駅は、ゴアランドー 1,657,100 マン、ナラヨンガンジ 669,900 マン、シラージガンジ 576,700 マン、ダッカ 236,600 マン、クシュティア 123,400 マン、パングシャ Pangsha 68,700 マン、チットプル Chipur 18,800 マン、クマルカリ 11,500 マンであった。

蒸気船による積出し港は、シラージガンジ 450,800 マン、ナラヨンガンジ 358,700 マン、カリガンジ 16,600 マン、マダリプル Madaripur 14,000 マン、ダッカ 3,000、その他 14,700 であった。

陸路の積出し地は 24-パルガナ（主にバラサット地区） 221,500 マン、ナディア 2,800 マンで計 224,300 マンであった。

ベンガル各県のジュート純輸出量を、再輸出分を除いて推定すると下表となる。

輸出県	粗輸出量	再輸出量	純輸出量
Mymensingh	1,922,600	7,600	1,915,000
Dacca	2,475,200	1,298,100	1,177,100
Rangpur	1,155,200	800	1,154,400
Pabna	2,877,800	1,796,100	1,081,700
Tipperah	554,400	700	553,700
Rajshahi	402,300	0	402,300
Faridpur	2,073,600	1,688,400	385,200
Purania	267,200	100	267,100
Bogra	266,900	0	266,900
24-Parganas	274,400	9,700	264,700
Dinajpur	240,500	0	240,500
Coch Behar	166,200	0	166,200
Nadia	235,300	103,000	132,300
Goalpara	111,900	0	111,900
Maldah	74,000	0	74,000
Jalpaiguri	67,900	0	67,900
Bakarganj	52,500	0	52,500
Jessore	50,100	2,000	48,100
Sylhet	27,000	0	27,000
Bardman	23,200	1,200	22,000
Murshidabad	22,100	3,000	19,100
	13,340,300	4,910,700	8,429,600

ベンガルの主要なジュート輸出市場は、シラージガンジ（パブナ県） 2,021,100 マン、ゴアランドー（ファリドプル県） 1,658,500 マン、ナラヨンガンジ（ダッカ県） 1,594,300 マン、ダ

ッカ（ダッカ県）266,600 マン、ゴラマラGhoramara（ラングプル県）246,000 マン、ドゥラールガンジDulalganj（プラニア県）243,000 マン、スバルナカリ(マイマンシン県)212,000 マン、ブリドーホBuridoho（ラージシャーヒー県）206,000 マン、マダリプル（フェアイドプル県）204,000 マン、パングシャ（パブナ県）163,000 マン、コリムガンジKorimganj(マイマンシン県)160,000 マンなどである。主な輸入市場は、コルカタ 8,302,300²⁹マン、シラージガンジ 1,792,500 マン、ゴアランドー1,685,200 マン、ナラヨンガンジ 1,294,800 マン、ブッドレッシュヨル 251,900 マン、クシュティア 99,100 マンであった。

3 ジュート袋 (Gunny Bags)

ジュート袋のベンガル域内貿易を示すデータを示す。ジュート袋には、工場製と手織とがあり、手織ジュート袋生産は 1876 年においても下層階級の人々の重要な生計手段となっていた。ベンガル域内からコルカタに輸出された手織ジュート袋は、17,504,500 袋であり、供給県はディナジプル県 3,550,640 袋、パブナ県 3,173,740 袋、ジャルパイグリ県 764,611 袋、ムルシダバード県 410,655 袋などであった。このほかに、プラニア県から 904,000 袋、パトナ県から 820,000 袋、マルダ県から 556,000 袋が輸出されており、フーグリ、ゴラクプル、サルン、ナディア、ムルシダバード、ガジプルなどに供給された。手織ジュート袋生産が多いのはベンガル北部諸県とビハールのプラニア、パトナ両県であった。

コルカタのジュート工場で製造される動力織機製のジュート袋は、東ベンガル鉄道によって東部インド、北部インドに 1000 万袋近く輸出されている。輸出先は、カーンプル県(260 万袋)、パトナ県(150 万袋)、デリー(70 万袋)、ジャバルプル県 Jubbulpore(50 万袋)、バルドマン県&ビルブーム県 (120 万袋) などである。ベンガル東部の域内需要は在地のジュート手織工の生産によって賄われており、ここには工場制ジュート袋は全く輸出されていない。

コルカタから海上輸出されたジュート袋は、工場制 64,662,900 袋、手織り 8,306,700 袋、合計 72,969,600 袋であり、その他のルートを含めた輸出総量は 8,200 万袋に達した。他方で、ジュート工場の産出量は 8,000~8,800 万袋であり、これに加えて手織り袋が 1,750 万袋輸入されていたから、コルカタ市内でも大量にジュート袋が消費されていたことになる。

内陸部では、ジュート布地の取引量も相当大きい。コルカタは、226,100 反のジュート布地を輸入した。バルドマン県クルナから 186,831 反が輸入され、残りはディナジプル県から輸入された。1 反は 20 ヤードである。コルカタからジュート布地が 710 万ヤード海外に輸出されたが、手織布は 10,900 ヤードのみであり、輸出は殆ど工場製品であった。

4 油性種子

油性種子は人々の生活必需品であり、その物流額は非常に大きい。油性種子は冬季（10~3 月）にベンガル管区内の至る所で栽培されるが、亜麻仁種子と芥子菜種子が主要なもので

²⁹ 先に、コルカタの総輸入量は 8,303,913 マンという記述があり、差 1,613 マンの理由は不明である。

あり、前者はガンジス上流のビハール州パトナ地方とバガルプル地方が大産地であり、後者はベンガル各県、アッサム州西部で主に産出される。下の表に明らかなように、1870～76年の期間では、ベンガル州の主要な油性種子である芥子菜種子よりもビハール州を主要供給地とする亜麻仁種子の方が3.6倍も大きい流通量に達していた。

	亜麻仁種子 マン	芥子菜種子 マン
1870-71	4,455,412	2,838,581
1871-72	3,820,238	1,539,847
1872-73	2,932,480	36,826
1873-74	3,127,643	136,803
1874-75	3,803,703	598,108
1875-76	5,604,994	1,233,066
1876-77	4,796,000	1,494,600
1870-76年平均	4,077,210	1,125,404

亜麻仁種子の輸出額は1840年20万^{ポンド}であったが、1851年には25万^{ポンド}³⁰、1862年75万^{ポンド}、1864年100万^{ポンド}、1870年160万^{ポンド}と拡大を続けている。輸出先は、北米、英国であり、ロシア産亜麻仁種子との激しい競争を繰り広げている。米国における亜麻仁種子の不作が60年代の著しい輸出増加の一因である。

芥子菜種子の輸出は変動が大きい。ドイツからの供給がフランスとプロシヤの戦争で落ち込んだ年に急激なインドからの輸出増加が生じたが、輸出品の劣悪な品質の為に大きな損失が生じ、翌年には急落した。だが、1875～6年になってやっと市場の信頼が回復し輸出が上昇しつつある。

これら油性種子の輸出増加の背景には、『年次報告書（1876年）』は関税自由化、豊作、インド通貨価値下落、ヨーロッパの戦争などを挙げている。

1876年の記録された亜麻仁種子の輸出量は、現地船4,111,600マン、蒸気船2,900マン、鉄道2,402,700マン、道路292,600マン、計6,809,800マンである。この内、コルカタが約500マンを輸入する。輸送手段は現地船2,519,300マン、鉄道2,402,900マン（東インド鉄道2,057,700マン、東ベンガル鉄道345,200マン）、道路43,000マン、蒸気船2,800マンである。主要な供給県は、パトナ県1,046,000マン、カーンプル県487,000マン、ナディア県447,000マン、サルン県430,000マン、フーグリ県344,000マン、ダルバンガ県250,000マンなどである。コルカタからの再輸出は480万マン。ナディア県は高みの土地が多く、ベンガルで唯一亜麻仁種子を量産し、この県内には米よりも重要な換金作物となっている地域が多い。

上記の輸出県の多くは、再輸出のために他地域から輸入する中継地である。例えば、パトナ県は、サルン県から21万マン、ガヤ県から11万マン、ゴラクプル県から11万マン、チャンパラン県から10万マンなど計77万マンを輸入して、105万マンを輸出した。大市場レヴェルガンジのあるサルン県は65万マンを輸出するが、アワドから42.5万マンを輸入している。ゴアランドーとクシュティアもパブナ県から芥子菜種子を輸入して、コルカタに再輸出してお

³⁰ 1ポンドの^{ポンド}-換算は、時期によって変動するので一概には言えないが、ほぼ、1^{ポンド}は10^{ポンド}-前後と見てよいだろう。

り、ブッドレッシュォルもモンギール、ダルバンガ両県から輸入している。

ベンガル州では芥子菜種子が生産量が最も大きい油性種子であり、住民もこれを最も好む。芥子菜は、地味の貧しい土地で育ち、河川敷などの新開拓地で作ることに適し、さらに生産量に比較して投入労働力は小さくてすむなどの利点があり、栽培は増加している。

芥子菜種子の全輸送量 5,585,900 マン中、現地船が 4,005,600 マン(71.8%)と圧倒的大きく、次いで鉄道 1,266,400 マン、陸路 21.7 万マン、蒸気船 96,900 マンである。

主要な輸出県は、ゴアルパラ、マイマンシン、パプナ、パトナ、ファリドプル、カーンプル、プラニア、カムルプ、コルカタの順であり、輸入県は、コルカタ、ファリドプル、パトナ、パプナ、ダッカ、フーグリ、サルン、ジェショール、バカルガンジ、ムルシダバード、24-パルガナの順とである。コルカタが輸出地として挙げられているのは再輸出によると思われる。

コルカタへの主要供給市場は、パトナ、ゴアランドー、カーンプル、ゴアルプル、シラージガンジ、デリー、ゴウハティである。コルカタからの海上輸出は 150 万マンだからコルカタ市内で大量に芥子菜種子が消費されていることになる。

ゴアルパラからゴアランドーに 378,000 マン、シラージガンジに 165,000 マンが送られ、これら両市場からコルカタに再輸出された。マイマンシン県からダッカ県に 195,000 マン、パプナ県に 140,000 マン、ファリドプル県に 118,000 マンが送られたが、ダッカ、パプナ両県からは大部分が再輸出され、他方、ファリドプル県では大半が域内消費された。

大再輸出地であるパトナは、ゴラクプル、サルン、ゴンダ、チャンパラン諸県から芥子菜種子を輸入した。アワド諸県は、まずレヴェルガンジに送り、そこから再輸出されてパトナに運ばれ、コルカタに至る。コルカタの大倉庫地帯であるフーグリ県ブッドレッシュォルは、プラニア、バガルプル、カーンプル、モンギール諸県から輸入し、ムルシダバード県は、プラニア、ゴラクプル、バガルプル諸県から輸入した。

このように油性種子の物流は、上記の主要供給市場を中継して、コルカタに到着した。これらの独特な流通パターンの背後にある油性種子の商人網・市場構造の考察は将来の課題としたい。

5 塩

低地ベンガルでは、塩は政府代理人が製造し販売した。1856年の価格は 2・8 ルピー・マンであった。1862年に制度が改められ、Agencies を徐々に廃止し、民間企業家に塩の供給を任せることが決まった。今日、ベンガルの塩消費は、オリッサと 24-パルガナを除き、全て輸入に依存している。輸入塩への関税は、1861年以降 3 ルピー・4 アナマンで、ほぼ全量がリヴァプールからの輸入だが、その他諸国からの輸入も増えつつある。

コルカタへの輸入量は 7,657,400 マン、チッタゴンへは 151,488 マン、その他、マドラスからオリッサに陸路 92,883 マンが輸入されたので、1876年のベンガル州への総輸入量は 7,901,771 マンであった。民間人が免許税を支払い製造した塩がオリッサで 374,000 マン、24-

パルガナで2~3万マツであったから、流通可能な塩の総量は830万マツになるが、このうち、アッサム州へ436,600マツ、北西諸州とアワドへ325,600マツ、ネパールへ76,900マツが再輸出された。こうしてベンガル管区内の全消費量は750万マツであり、人口62,706,774人で割れば、一人当たり年間4.75シェールを消費したことになる。

1875年の塩輸入は史上最大規模であり、その結果、年末にベンガル全体の消費を6か月賄える415万マツという異常に大きな在庫が発生し、1876年度末の在庫もなお370万マツと巨大であった。1876年には塩の鉄道輸送が顕著に増加し、これまで僅か5万マツ程度であった東ベンガル鉄道の塩輸送が過去2年間で45万マツに達した。これは、最近、同鉄道が塩輸送により慎重な配慮を払うようになったことによる。これまで鉄道輸送中に塩がしばしば盗まれる（袋に穴を開けて盗む）と商人が抗議してきており、商人はこの窃盗を避けるために現地船で輸送した。鉄道は料金が高い上に盗みによる損失が大きかったのだが、この状況に改善が見られたので、1873年度35,000マツから74年度82,782マツ、1875年度116,171マツ、1876年度442,600マツと急激に増加したとされている。

一人当たり塩の消費は東ベンガルが最大であり、オリッサ州の消費量がやや小さい。だがオリッサでは製塩が行われているから、記録されず、税を払わない塩の消費がある。ビハール州では硝石製造の過程で完全精製塩（pakka salt）が生産され、それが記録されずに消費に回っている。硝石製造者（nonnya）は、こうして硝石と同量の塩を得る。ちなみに1876年のビハール州の硝石生産量は30万マツとされている。だが、完全精製塩を食すると皮膚病などになると言われており、これを消費するのは低所得層に限られるし、所得が上昇すれば、彼らもリヴァプール塩を選好する。

チョタ ナグプルの塩輸入は明らかに人口に比して過小だが、ここでは岩塩がとれるし、中央インドからも塩が入ってくる。アッサム州への塩輸入は大きい。ベンガル州から北西諸州へ輸出される塩は殆どゴラクプルで消費される。

主要な塩輸出市場は、コルカタ7,387,400マツ、パトナ616,500マツ、シラージガンジ386,400マツ、ゴアランドー143,700マツ、ナラヨンガンジ135,900マツ、チッタゴン138,400であった。

6. 原綿

ベンガル州ではチッタゴン県とティッペラ山岳地帯、そして、ジャルパイグリ県などの北部、東部の山岳地帯では綿花栽培は重要であるが、それらを除けば綿花栽培はとるにたらない。域内需要にも大きな不足が生じる状況であるから原綿輸出はない。ベンガル州は北西諸州から原綿を、英国から綿布を輸入している。

農民の間では、外国産綿布より耐久性の高い自家製綿布への需要が強いが、かといって輸入綿糸・綿布が増大する中で、綿花栽培を拡大する動きは見られない。

北西諸州の原綿が、鉄道でコルカタに運ばれ、さらに海外に輸出されることはある。北西諸州、パンジャブ州からコルカタへの原綿輸出は461,161マツであり、その他に、海路でボンベイから72,761マツ、マドラスから37,579マツ、ビルマから43,200マツなど、合計154,275

マンが輸入された。コルカタへの原綿輸入総量は 625,203 マンであり、その価値は 125 万ポンドに達した。輸入原綿の内 115,066 マンが、コルカタ近郊の綿工場で消費される。

ベンガル州全体の原綿輸入総量は、923,900 マン（現地船 422,000 マン、鉄道 480,200 マン、道路 21,700 マン）であり、その内で、1 万マン以上をベンガル州に輸出している諸県を、ベンガル州の域内輸出も含めて、以下に挙げておこう。北西諸州のアグラ県から 156,200 マン、カーンプル県から 103,800 マン、コルカタからの再輸出が 86,600 マン、デリーから 70,200 マン、アッサム州のゴアルパラ県から 60,500 マン、チッタゴン県から 51,100 マン、ラングプル県から 45,300 マン、ラージプタナ藩王国から 44,800 マン、ミルザプル県から 35,600 マン、ダッカ県から 31,800 マン（但し、再輸出か県内生産物かは不詳）、ティッペラ県 30,400 マン、パトナ県 29,500 マン、バランドシャハル県から 27,900 マン、アリガル県から 26,400 マン、ガジプル 14,800 マン、ジャバルプル 12,600 マン、以上である。周知の北西諸州のみでなく、アッサム州やチッタゴン山岳地帯、北部ベンガルからもかなりの輸出が行われていることに注意しておきたい。

では、これらの原綿を消費したのはベンガルのどの県であろうか？ 原綿 1 万マン以上を輸入した諸県・諸地域を示しておこう。コルカタ 470,900 マン、ダッカ県 107,400 マン、ラングプル県 58,400 マン、ファリドプル県 42,400 マン、パブナ県 31,200 マン、ムルシダバード県 22,100 マン、メディニプル県 21,600 マン、バカルガンジ県 17,000 マン、ムザッファルプル県 16,400 マン、プラニア県 14,300 マン、パトナ県 13,200 マン、ネパール 10,900 マンである。

コルカタに次いで綿花を輸入するのはダッカ県（107,400 マン）で、チッタゴン山岳地帯から 47,700 マン、ティッペラ県から 29,900 マン、コルカタから 8,500 マンが供給された。ラングプル県への輸入は、ゴアルパラ経由でガロ山地から 48,500 マン、ダッカ県から 4,400 マンが輸入された。ムルシダバード県へは、ミルザプル県から 16,300 マンが輸出された。ビハール州諸県へは北西諸州から直接に輸入された。

以上の羅列された数値から、その背後にこれらの原綿を使用する手織機の織工が相当数これらの諸県に存在し、営業を続けていたと考えられるから、「脱工業化論」の考察へ一つの具体的な材料を与えてくれるものとして非常に貴重である。

7. ヨーロッパ産綿反物

19 世紀後半になるとベンガル域内市場向けに大量に海外（専ら英国）から工場製綿反物・綿糸、塩、鉄道建設機材などが輸入された。1876 年に英国から海外に輸出された綿製品（綿反物）の評価総額は 50,374,875 ポンドであったが、下掲表から読み取れるように、その 4 分の 1 が英領インドに向かっており、英国綿業にとって群を抜いて大きな市場を提供していた。中でも、コルカタへ入港した綿製品の量は巨大であり、ルピー表示すれば、実に、96,763,105 ルピーという莫大な金額に達した。コルカタからの再輸出は 10,641,052 ルピー（オリッサに 1,176,707 ルピー、チッタゴンに 1,128,181 ルピー、マドラスとボンベイに 1,064,076

	£		£	
英領インド		12,758,673	トルコ	4,188,074
ベンガル	8,132,707		ブラジル	2,813,747
ボンベイ	3,961,763		フランス	1,629,100
マドラス	664,203		イタリア	1,349,669
中国		5,026,094	米国	1,279,106

ルピー、英領ビルマに 6,755,880 ルピー、その他の港に 516,199 ルピーであった。残る 8,600 万ルピー相当の綿布はコルカタ市内で消費されたと考えられよう。なお、上記金額は関税申告の数値であり、25%は過少申告されていたと思われるし、また、内陸への輸送コストなどを加えると、入港した英国綿布の総額は 1 億 2,250 万ルピーに達したと推定される。他方、コルカタから各地への再輸出は、物流統計により 1 億 1,500 万ルピーであるから、その輸入額との差額は 750 万ルピーとなる。この差額の内、コルカタ市内での消費分 250 万ルピー、フーグリ、24-パルガナの域内消費分 250 万ルピー、そして、残る 250 万ルピー分相当はコルカタ市内の商人の在庫相当額であると推定されている。

一人当たり平均反物消費額（西洋人も含めて）は、コルカタでは 3.5 ルピーであり、内陸部では 2.5 ルピーであった。コルカタでは、インド産布地は全消費量の 20%に過ぎないが、内陸部では現地産品がなお 75~80%に達していたと思われる。コルカタとその近郊の人口 90 万人に対して、反物消費額は 315 万ルピーであり、そのうち、輸入布が 80% (252 万ルピー) と推定される。

コルカタから内陸部への推計 1 億 500 万ルピーの英国産綿布輸出のうち、1100 万ルピー分は河川、道路で輸送され、残りは鉄道で運ばれた。その他に、チッタゴン、オリッサに海上輸出された 2.5 万ルピー分があった。6000 万ルピー分は、ベンガル準知事の管轄域内で消費され、3000 万ルピー分は北西諸州とアワドで、1500 万ルピー分はパンジャブ州その他で、消費された。ネパールには 140 万ルピー分が輸出された。

県間輸出は鉄道の駅ごとの統計では捉えきれない。例えば、ナディア県は 710 万ルピー分を輸入したが、記録された輸出は 205 万ルピー分であり、残る 505 万ルピー分は県内で消費されたことになる。しかし、実際はこの県の鉄道駅チョグダー、キシエンガンジから大量にジョシオール県に再輸出されている。同様に、商品の集積地を含む県（例えば、パトナ、ダッカ、ファリドプル、パブナなど）の見かけの一人当たり県消費量は過大に現れる。そこで、適当に輸出先のいくつかの県を結合させて平均を取ると、一人当たり消費額は平準化する。ただし、コルカタ圏はこの議論では例外である。結局、内陸地域のヨーロッパ綿布消費は一人当たり平均 15 アナ 10 パイとなる。1876 年、英領インド全体ではヨーロッパ綿布の輸入額は 158,298,545 ルピーに達した。これに過少申告や、輸送費などの調整分として 25%を加えると、190,000,000 ルピーを超える。インドの人口は 2 億 3900 万人だから、平均消費額は 13 アナ 2 パイとなる。従って、ベンガルの平均消費額はインド全体を多少上回る。

ベンガル各県の平均消費額をみると、東ベンガルが高く、西ベンガルが低い。又、アッサム、ビハールが高く、オリッサ、チョタ ナグプルが低い。この地域差を如何解釈すれ

ばよいかという点については、『年次報告書（1876年）』は、一人当たりヨーロッパ反物消費量が東ベンガルで高いのは、東ベンガルの繁栄（米、ジュート、油性種子の輸出）によるとする。だが、本稿の筆者は直ちにこのステレオタイプ化された解釈に同意することにはためらいを感じる。なぜなら、東ベンガルの消費量の平均値がビクランプルなどに分厚く存在する郷紳層（bhadralok）により引き上げられている可能性が高いからである。これは、例えば、ダッカ、ファリドプル、ナディアなどの上位カースト層、郷紳層が多い諸県で、英国産綿布の消費量が高いことと平仄が合う事実である。これらの地域の富の分布状況をも視野に入れた考察が必要である。ところで、『年次報告書（1876年）』は、ビハール州で平均消費量が高いのはパトナの存在によると指摘している。パトナの大量の輸入の大きな部分はディナプル Dinapur から北西諸州へ、また、チャラゴラ Caragola とラージマハルから北ベンガルへの再輸出を含むのだが、これらは物流記録システムでは捕捉されていない。また、西ベンガル諸県の輸入量が低いのは、ここが“the country of weavers, and the supply of the native-made cloth is great”であるからという重要な指摘がなされている。メディニプル県は撚糸の輸入量が多いという重要な指摘もされている。オリッサ州でも現地織工がなお強いことも指摘されている。先に原綿の項で述べたように、原綿の流れを見る限り、むしろ、ダッカ、マイマンシン、パブナ、ラグプルなどの東ベンガル、北ベンガルにも多数の手織織工が存在したと推測されるのだが、そこでは英国産綿布の消費量は必ずしも低くない。こうして、輸入綿布の地域毎の浸透度の相違を理解するには、民富の規模とその分布状況、郷紳層、在地手織物産業、原綿需要、商業的再輸出などの諸要因を視野に収めた解釈が与えられなくてはならないが、これは将来の課題である。

ヨーロッパ綿反物の主要輸出市場はコルカタ 1 億 1554 万ルピー、次いで、クシュティア 195 万ルピー、パトナ 176 万、ゴアランドー 172 万ルピー、シラージガンジ 80 万ルピー、ナラヨンガンジ 76 万ルピーと続いている。

8. ヨーロッパ綿糸 (twist and yarn)

1876 年度にコルカタに海路輸入された綿糸は 174,821 マン (12,237,470 ルピー) であり、このうち、160,600 マン (91.9%) は内陸部に再輸出された (鉄道・道路 102,700 マン、現地船、蒸気船 57,900 マン)。その輸入量をみると、メディニプル県、ナディア県、ダッカ県、ファリドプル県、バルドマン県の順であり、まさに、伝統的な綿業・織工が存在した地域である。しかし、原綿の項で見たように、ベンガル州に入った原綿量は 90 万マンを超えている。『年次報告書（1876年）』も指摘するように、都市部はさておき農村部では、住民の需要の 70% 以上はなお伝統的な手織り布で満たされていたとするなら、ベンガルの織工の使用した綿糸の大半は依然としてインド国内で調達された恐らくは手で紡いだ糸であったといえるのではないだろうか？

<英領期ベンガル地方の物流の地域性－小括－>

上にみたように、1876年時点のベンガル州の商業取引の特徴として、総取引額の約60%に相当する商品が植民地的性格を強く持つものであったことが挙げられる。とはいえ、量的にも金額的にも米や油性種子などの伝統的商品はなお重要な位置を占め、輸送手段においても、現地船がなお全物流の過半を担っていた。

さらに詳しく物流データを見ると、ベンガル州内の物流の態様には強い地域性が見られる。この地域性を勘案するために県別に物流を合計すると表5になる。この表に現在私は注目している。それは、いかなる意味においてか？

1 地域性の分析

1876年のベンガル地方各県について、県毎の輸出入収支バランスを示す表5を検討する。第4欄、第5欄に注目しよう。

- 1) 輸入を輸出で割った指数（輸出入比率）の数値（第5欄）を見ると、州レベルではベンガル州0.79、ビハール州1.02、オリッサ州0.62であり、3州間にかなり明確な差異が見られる。
- 2) ベンガル州内に目を移してみると、輸出入比率の県毎・市場毎の数値にも非常に大きなバラツキが見られる。極めて多数の郷紳人口を抱えるダッカ（ビクランプルを含む）³¹と、再輸出の基地であるチッタゴン、ゴアランドー、ナラヨンガンジ、シラージガンジなどでは、同じ市場地でも物流の果たす機能が違うのであり、この違いが輸出入比率の数値の差に反映している。
- 3) こうして輸出入比率のバラツキは、ベンガル州内の物流・市場・消費・生産・社会構造の多様性（地域性）を示すと考えられよう。本稿のテーマがこの数値に集約されている。

2 地域性の諸要因

このような地域性がいかにして生じたのか？輸出入比を昇順に並べ替えた表6第5欄を手掛かりにして、その要因を簡単に考察してみよう³²。

- 1) 要因群Aとして、輸入輸出比率を低下させる（出超にする）要因群を考えよう。

例えば、ディナジプル県の異常に低い値（0.17）、つまり、大幅な出超構造はどう解釈したらよいのか？最も素直な解釈は、ディナジプル県の地域経済構造が極めて高い自給度を保持しているから県外からの輸入を必要としないという仮説（A1）であろう。確かに、輸入綿布の代わりに女性が手織機（いざり機）で、麻布、綿布、地絹布などを生産する自給的構造がここには強く残っている。この地方の女性の特有の肩を出した着衣方法はこの地域で好まれる繊維の種類に影響を与え、外来繊維に対する在地的手織機産業の抵抗力を増している。地代を払うための貨幣を米によって獲得すれば、それ以上の貨幣支出は必要と

³¹ ダッカ県内のこうした構造については、拙稿『地域構造（III）』を参照されたい。

³² なお、1876年度は南インドにおける飢饉状況により米輸出が未曾有の規模に達したから、米剰余県の輸出が平年より大きくなり、その為に米剰余県の第5欄の数値が低下した可能性は否定できない。だが、これはベンガルの多くの県について同様に生じた事態であったから、この比率の各県間の相対的分布状況を一変させたとは思われない。

されず、自給自足的な生活形態を強く保持していたということである。各県への原綿と輸入綿糸の輸入量の時系列的变化を考察することによって、いわゆる脱工業化論争への一つの具体的な手掛かりを得られるであろう。

ディナジプル県の人口中のラージバンシーRajbangshi を主とする山岳部族民人口比の高さも伝統的生活スタイルの根強い影響と自給性の高い経済構造を説明する一つの要因(A2)といえよう。物流統計報告には、各県のヨーロッパ産綿布の一人当たり輸入量、綿糸、原綿の輸入量も与えられており、それらを分析することにより、衣料品の自給度を推定することが可能となろう。この県のカースト構成において、麻布・麻袋生産に携わる下層カーストの人口が大きいことも勘案されねばならない。こうして、19世紀後半のベンガル州においてはカースト的分業体制の **globalization** に対する抵抗力は微弱であるが、他方、山岳部族的な自給体制の **globalization** への抵抗力は大きいという一つの仮説を提示することが可能であろう。脇道にそれるが、工場制ジュート産業がコルカタ周辺で確立すると、上述の手織り麻袋の生産者は彼らの商品への需要を失い、経済的に大きな打撃を受けたであろう。さらに、この県のよく知れた刈分け小作制度 (**bargadari system**) の高度な展開は、ベンガル有数の米産地であるこの県の農業収入が地主(**jotedar**)、金貸し(**mahajan**)層の手に集中して偏在するという歪んだ分配構造をもたらしていると考えられるから、一般住民の生活は自給的性格を強く持たざるを得なかったという仮説も可能であろう(要因 A3)。多かれ少なかれ、A1、A2、A3 の仮説が妥当すると思われる諸県は、ジャルパイグリ、ティッペラ、コッチビハール、ラングプル(北部)、ディナジプル(北部)などである。

逆に言えば、山岳部族の人口構成比が高くても、彼らの伝統的な経済構造が崩壊しているところでは、外部からの物資輸入に依存することになる。チョタナグプルやサンタルパルガナはこれに当てはまるかもしれない。ここでは、良く知られているように、ヒンドゥー商人・金貸し層の進出による伝統的土地制度の崩壊(要因 A4)とアッサム茶園への大量の人口流出(要因 A5)が生じた。

カースト体制に組み込まれた下層部族集団ナマシュードラ **Namasudra** の人口比の大きいファリドプル、バカルガンジ、ダッカの諸県については、さらに別の事情の考察が必要になる。つまり、ファリドプル、ダッカ両県では、次に2)で説明する逆方向のB1、B2要因が強く効いて、県レベルの集計値では、県内のA要因が相殺されてしまったのではないかと思われるのである。同じくチッタゴンでも、B1要因の強さがA1要因を上回っていると思われる。

2) 要因Bは、輸入輸出比率を上昇させる要因群である。ここには、要因B1：大商業中継拠点の存在(鉄道、蒸気船、現地船、道路の要衝)、要因B2：高い郷紳人口比、要因B3：高い都市人口比・工業人口比、要因B4：高い購買力を生む農産物(ジュート、米、茶、タバコ、藍、サトウキビなど)の存在=商業的農業の発達などがある。

3) この様に整理すると、被説明変数を輸入・輸出比とし、A、B2つの異なる符合を持つと予想される説明変数群をもつモデルが出来るから、統計的検定が可能になるかもしれ

れない。この時、このモデルに託される大きな仮説が、「Globalization による在地社会の変容」であり、仮説設定の目的は、社会変容要因の探究である。

輸出入比率の構成・変動要因を、例えば、市場構造要因、在地社会経済構造要因、農業要因、生態学的要因（ベンガル近代経済史では著名な河川流路の変更による西ベンガルの生態学的衰退と東ベンガルの繁栄という説）、世界市場要因、植民地要因、商人（Actor）要因などから構想することも可能であろう。

3 課題

今後なされるべき課題は、ベンガル州各県の輸出入構造、農業構造、土地所有構造、人口構造（センサスの職業構成、カーストなどの *ethnic composition* を含めて）、近代教育の住民階層別普及度などの総合的な検討である。だが一挙にその全てを行うことは不可能であるから、当面の作業では、まずは県毎の輸出入構造とその時系列的な変化を中心に見ていくことにしたい。

付録 1 : ベンガル管区内物流記録所の配置 (1876)

Sarun と北西州のへ運輸は Gogra 河を通るから、Durowli に特別に記録所を設け、その他の Bihar の物流は Patna の主記録所で記録。Gogra 河沿いでは Revelganj、Gunduck 河沿いでは Hajipur に支記録所を設けたが、Durowli の記録所の設立により、Revelganj の記録所は不要となった。東に向かう Gunduck 貿易は Sahibganj で記録されるから、西に向かう交易だけが Patna で記録された。

記録所は、Patna 記録所、Sahibganj 記録所、Nadia 河川の 3Toll Stations (Jangypur、Nadia、Kishenganj)、Hughli 記録所 (Ganges と Cal の交易の大半が通過。仏領 Chandernagar を根拠地にする阿片密輸を監視する役目も持つ。)、Chilmari、Sirajganj、Goalundo、Kushtia 記録所、Khulna 記録所 (Jessore Sunderbans。Bakarganj の品物を Calcutta に運ぶ船が通過)、Calcutta Canals registration (Circular or Baliaghatta canal : Chitpur から Bamonghatta までの 12 マイルで、両端に記録所。もう一つは Tolly's nullah で、Khidderpur から Samookpotta 迄の 16 マイルで両端に記録所。)、コルカタ港湾管理官波止場の複数の記録所、Medinipur の Hijli (Low) canal と High canal や Orissa の Canals (227 マイル)。これらにも記録所) Brahmaputra 沿いの Nasirabad (Mymensingh 県) 記録所、Megna 沿いの Bhoyrub Bazar 記録所、Narayangunge 記録所、Chittagong 市内記録所。

1875年3月に、ベンガル、北西州、アワド、パンジャーブ、中央州の代表団が会議を持ち、記録収集方法を検討。ベンガル州と他州との貿易は、(i)北西州、(ii)中欧州、(iii)South-Western Frontiers and the Presidency of Madras、(iv)Northern Frontier、including Nepal, Sikkhim、and Bhutan、(v)Assam Province、(vi)Hill Tipperah、(vii)the British Burmah の7つに分類された。(iii)では、Cuttack と Ganjam の間の Rumbha に記録所を設ける。ベンガルと Nepal には多数の輸送路があり、また、国境線も長いので、運輸記録の作成は困難である。(i) では、Champaran、Mozaffarpur、Darbhanga、Purania の 10 箇所記録所が設けられ、(iv)との間では、Darjiling、Sikkim、Jalpaiguri、Bhutan などの国境線に 10 箇所の frontier stations (辺境記録所) が設けられ、Nepal、Sikkim、Bhutan の各政府には記録所設置の意図を通告した。(v)の東ベンガルと Assam の間の記録も難しいが、大半の交易は河によるから、Chilmari と Bhoyrub Bazar に記録所が設置された。(vi)の Hill Tipperah と南東辺境地区の間には陸路の交易は存在せず、Chittagong と British Burmah の交易も海路が大半を占める。

表1 年次物流報告書のタイトルの変遷 (1876~1921年)

IORL Call Number: V/24/4176~4200 (British Library内の請求番号)

Report on the Internal Trade of Bengal 1876-1900 (シリーズ名)

4176 (1876-77) ~4183 (1883-84)

Report on the Internal Trade of Bengal for the years XXXX-XX.

4184 (1884-85)

Report on the River-borne Traffic of the Lower Provinces of Bengal and on the Inland Trade of Calcutta and on The Trade of Chittagong and the Orissa ports for the year 1884-85.

4185 (1885-86) ~4188 (1888-89)

Report on the River-borne Traffic of the Lower Provinces of Bengal and on the Inland Trade of Calcutta and on The Trade of Chittagong and the Orissa ports with Notes on Road Traffic for the Year XXXX-XX.

4189 (1889-90) ~4190 (1890-91)

Report on the River-borne Traffic of the Lower Provinces of Bengal and on the Inland Trade of Calcutta and on The Trade of Chittagong and the Orissa ports 1889-90

4191 (1891-92) ~4199 (1899-1900)

Report on the River-borne Traffic of the Lower Provinces of Bengal and on the Inland Trade of Calcutta and on The Trade of Chittagong Port for the year XXXX-XX

4200 (1900-01)

Report on the Trade of Bengal by River and of Calcutta by all Routes in the year 1900-01

IORL Call Number: V/24/4205~4237

The Report on the Rail-borne Traffic of Bengal, 1884~1921 (シリーズ名)

4205 Irregular

4206 (1891-92) ~4214 (1899-1900)

Report on the Rail-borne Traffic of Bengal during the year XXXX-XX,

4215 (1900-01) ~4226 (1910-11)

Report of the Trade carried by Rail and River in Bengal in the official year XXXX-XX

4227 (1911-12)

Report on the Trade carried by Rail and River in Eastern Bengal in the official year 1911-12

4228 (1912-13) ~4237 (1921-22)

Report on the Trade carried by Rail and River in Bengal in the official year XXXX-XX

表2: 物流記録の商品一覧表(1876年)

商品番号	商品名	輸入				輸出					
		現地船	蒸気船	鉄道	道路	現地船	蒸気船	鉄道	道路		
		合計金額 ルビ-				合計金額 ルビ-					
I	家畜										
	1. 馬、ポニー、ラバ (頭数)										
	2. 畜牛 (頭数)										
	3. 羊、山羊 (頭数)										
	4. その他 (頭数)										
II	ホウ砂(Borax) (マン)										
IIa	建築材料										
	1. 石灰、石灰岩 (マン)										
III	籐(canes and rattans) (ルビ-)										
IV	生ゴム(caoutchouc) (マン)										
VI	石炭とコーク (マン)										
VII	原綿 (マン)										
VIII	綿製品										
	1. ヨーロッパ製擦糸・紡糸 (マン)										
	2. インド製擦糸・紡糸 (マン)										
	3. ヨーロッパ製綿布 (ルビ-)										
	4. インド製綿布 (ルビ-)										
IX	薬種・薬劑										
	2. その他(陶酔性なし) (ルビ-)										
	3. 陶酔劑(阿片以外) (マン)										
X	染料										
	1. 藍 (マン)										
	2. 茜(madder or manjit) (マン)										
	3. 紅花(safflower) (マン)										
	4. ウコン(tumeric) (マン)										
	5. その他 (マン)										
XI	土器・陶器 (ルビ-)										
XII	繊維製品										
	1. 原料ジュート (マン)										
	2. ジュート製品										
	a. Gunny bags (個数)										
	b. Gunny布 (反)										
	3. その他の繊維原料 (マン)										
	4. その他の繊維製品 (マン)										
XIII	果物・堅果(ナッツ)										
	1. ココナッツ(ココヤシの実)(個数)										
	2. その他 (マン)										
XIV	穀類と豆類										
	1. 小麦 (マン)										
	2. 豆類(gram and pulses) (マン)										
	3. その他の春作物 (マン)										
	4. 精米 (マン)										
	5. 籾米 (マン)										
	6. その他の雨季作物 (マン)										
XV	粘性ゴムと樹脂(gums and resins) (マン)										
XVI	皮革(hides and skins)										
	1. 畜牛の皮革 (枚数)										
	2. 羊、山羊、小動物の皮革 (枚数)										
XVII	角 (マン)										
XVIII	ラック										
	1. 染料ラック (マン)										
	2. シェルラック (マン)										
	3. 棒ラック、その他 (マン)										
XIX	皮革(Leather)										
	1. 未加工皮革 (枚)										
	2. 皮革製品 (ルビ-)										
XX	酒類 (ルビ-)										
XXI	錠 (ルビ-)										
XXII	金属、金属製品										
	1. 真鍮・銅 (マン)										
	2. 鉄 (マン)										
	3. その他 (マン)										
XXIII	油 (マン)										
XXV	塗料・絵の具 (マン)										
XXVI	食料										
	1. ギー (マン)										
	2. その他(野菜含む) (マン)										
XXVII	塩 (マン)										
XXVIII	硝石など										
	1. 硝石 (マン)										
	2. その他の塩化物 (マン)										
XXIX	種子										
	1. 油性種子 (マン)										
	a. 亜麻仁 (linseed) (マン)										
	b. 芥子菜油 (mustard and rape) (マン)										
	c. 胡麻油 (gingelly or til) (マン)										
	d. その他 (マン)										
	2. その他の種子										
	a. 藍の種子 (マン)										
	b. 茶の種子 (マン)										
	c. その他 (マン)										
XXX	絹										
	1. 生絹 (マン)										
	2. 絹製品 (ルビ-)										
XXXI	香辛料 (マン)										
	a. ベテルの実 (マン) (個数)										
XXXII	石、大理石 (マン)										
XXXIII	砂糖										
	1. 精白糖 (マン)										
	2. 粗糖 (マン)										
XXXIV	茶										
	1. インド茶 (マン)										
XXXV	タバコ (マン)										
XXXVI	木質 (wood)										
	1. 材木 (マン)										
	2. 燃料 (マン)										
	3. 竹 (本数)										
XXXVII	羊毛 (wool)										
	2. 羊毛製品 (ルビ-)										
XXXVIII	その他の商品										
	1. 未加工品 (ルビ-)										
	2. 製品 (ルビ-)										
	総金額 (ルビ-)										

表3: 主要商品(物量と金額)と輸送手段

List of Articles	By	By river	By rail	By roads	Total	
	country	steamers			Quantity	Value
	マン	マン	マン	マン	マン	ルビ°ー
Rice and paddy-						
Rice not in the husk	18280600	345500	4469500	1900200	24995800	56802000
Rice in the husk	5903400		29800	877300	6810500	
Wheat	2733000	10300	4822500	20900	7586700	15173000
Pulses and gram	4272400	65000	1124700	265100	5727200	10023000
Other food-grains	1843000		107300	314000	2264300	3963000
Total of food-grains	33032400	420800	10553800	3377500	47384500	85961000
Jute	9178600	587900	3382400	242500	13391400	40984000
Linseed	4111600	2900	2402700	292600	6809800	27239000
Mustard	4005600	96900	1266400	217000	5585900	22344000
Other oil-seeds	903100	4000	1302500	45900	2255500	5921000
Total of oil-seeds	9020300	103800	4971600	555500	14651200	55504000
Indigo	40950	160	115170	410	156690	31338000
Tea	12200	266900	95300		374400	29952000
Silk	14408	355	17130	37	31930	15965000
Sugar(refined)	1165700	11100	303600	104600	1585000	19020000
Ditto (unrefined)	2278900		562700	119300	2960900	11843000
Tobacco	1724100	22300	280900	113000	2140300	10701000
Raw cotton	422000		480200	21700	923900	13859000
	枚	枚	枚	枚	枚	
Hides	1421200	12300	3502700	119900	5056100	
	Mds.	Mds.	Mds.	Mds.	Mds.	
Saltpetre	337000		518400	19300	874700	
	ルビ°ー	ルビ°ー	ルビ°ー	ルビ°ー	ルビ°ー	ルビ°ー
European piece-goods	12082100	5677200	93875600	3017600		114652500
	マン	マン	マン	マン	マン	
Cotton twist (European)	62100	2900	97800	7500	170300	11921000
Salt	6633000	108400	2384700	304600	9430700	47153000

(注) 表中の計算ミス、コピーミスと思われる若干の数値は訂正した。

表4: 主要商品(物量と金額)と輸送手段 (%表示)

List of Articles	By country	By river	By rail	By roads	Total Quantity	Value		
	%	%	%	%	%	ルビ°-	ルビ°-	%
Rice and paddy-								
Rice not in the husk	73.13	1.38	17.88	7.60	100.00	56802000		11.27
Rice in the husk	86.68	0.00	0.44	12.88	100.00			
Wheat	36.02	0.14	63.57	0.28	100.00	15173000		3.01
Pulses and gram	74.60	1.13	19.64	4.63	100.00	10023000		1.99
Other food-grains	81.39	0.00	4.74	13.87	100.00	3963000		0.79
Total of food-grains	69.71	0.89	22.27	7.13	100.00	85961000	85961000	17.05
Jute	68.54	4.39	25.26	1.81	100.00	40984000	40984000	8.13
Linseed	60.38	0.04	35.28	4.30	100.00	27239000		5.40
Mustard	71.71	1.73	22.67	3.88	100.00	22344000		4.43
Other oil-seeds	40.04	0.18	57.75	2.04	100.00	5921000		1.17
Total of oil-seeds	61.57	0.71	33.93	3.79	100.00	55504000	55504000	11.01
Indigo	26.13	0.10	73.50	0.26	100.00	31338000	31338000	6.22
Tea	3.26	71.29	25.45	0.00	100.00	29952000	29952000	5.94
Silk	45.12	1.11	53.65	0.12	100.00	15965000	15965000	3.17
Sugar(refined)	73.55	0.70	19.15	6.60	100.00	19020000	19020000	3.77
Ditto (unrefined)	76.97	0.00	19.00	4.03	100.00	11843000	11843000	2.35
Tobacco	80.55	1.04	13.12	5.28	100.00	10701000	10701000	2.12
Raw cotton	45.68	0.00	51.98	2.35	100.00	13859000	13859000	2.75
Hides	%	%	%	%	%			
Hides	28.11	0.24	69.28	2.37	100.00	10112200	10112200	2.01
Saltpetre	%	%	%	%	%			
Saltpetre	38.53	0.00	59.27	2.21	100.00	5248200	5248200	1.04
European piece-goods	%	%	%	%	%			
European piece-goods	10.54	4.95	81.88	2.63	100.00	114652500	114652500	22.74
Cotton twist (European)	%	%	%	%	%			
Cotton twist (European)	36.47	1.70	57.43	4.40	100.00	11921000	11921000	2.36
Salt	70.33	1.15	25.29	3.23	100.00	47153000	47153000	9.35
Grand Total							504213900	100.00

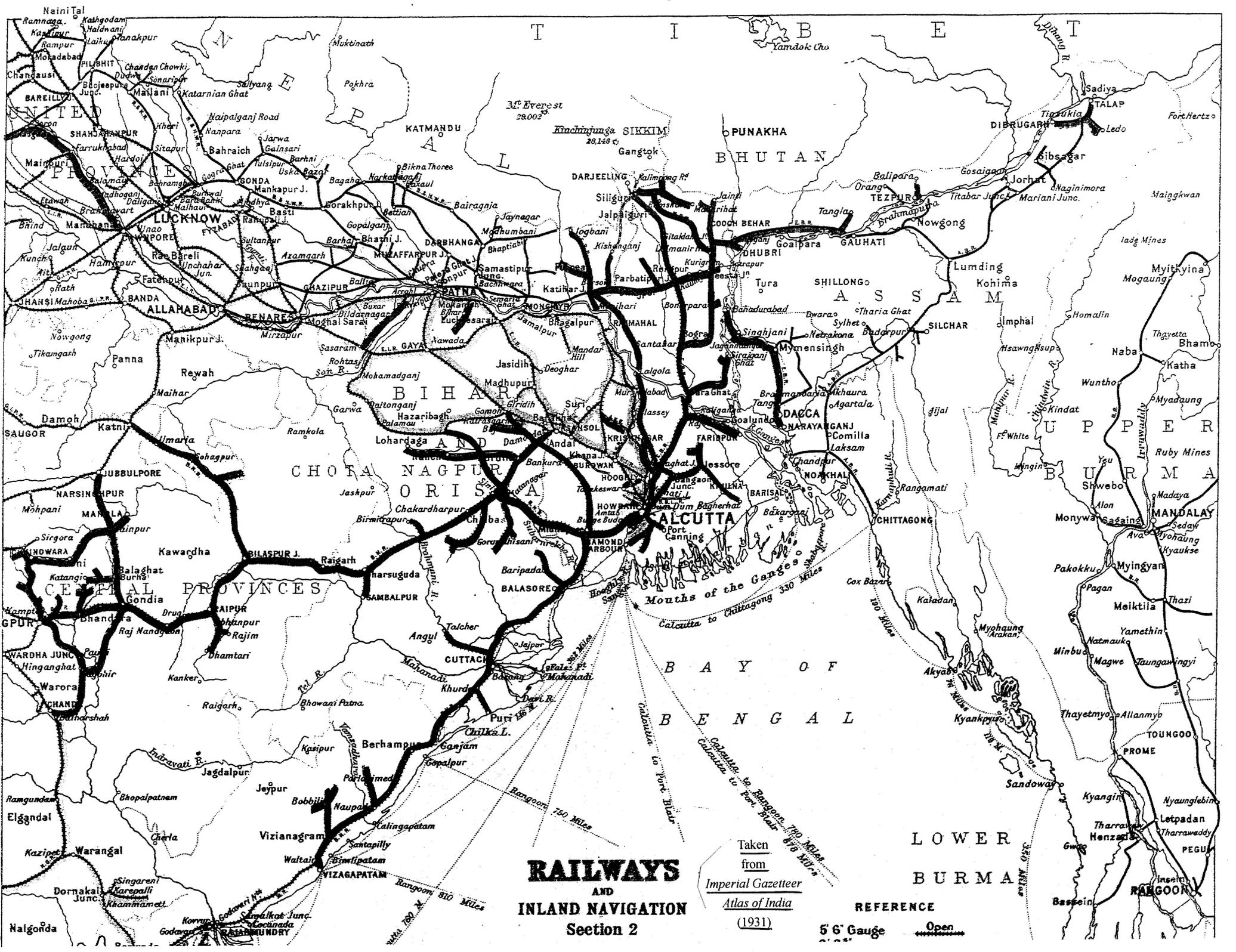
表5: 県別輸出入比率

District	輸出 金額(ルピー)	輸入 金額(ルピー)	出超	輸入/輸出
Bengal				
Bardman	10732271	6368225	4364046	0.59
Birbhum	2353810	1202000	1151810	0.51
Medinipur	10963175	6840133	4123042	0.62
Hugli	12929285	7251856	5677429	0.56
24-Parganas	16445309	5942144	10503165	0.36
Nadia	22015300	20778600	1236700	0.94
Jessore	12175110	6758342	5416768	0.56
Murshidabad	10201424	7399066	2802358	0.73
Dinajpur	4803710	815818	3987892	0.17
Maldah	3216167	2756807	459360	0.86
Rajshahi	9078551	4397998	4680553	0.48
Rangpur	9324421	4800465	4523956	0.51
Bogra	2474798	859908	1614890	0.35
Pabna	22052773	23245900	-1193127	1.05
Jalpaiguri	1760446	421188	1339258	0.24
Cooch Bihar	1526834	558372	968462	0.37
Dacca	19441945	32457100	-13015155	1.67
Faridpur	19490440	23436480	-3946040	1.20
Backarganj	10978484	8231597	2746887	0.75
Mymensingh	13255630	8358033	4897597	0.63
Tipperah	6062043	1707402	4354641	0.28
Chittagong	3316359	4422781	-1106422	1.33
Noakhali	2496489	872040	1624449	0.35
Bihar				
Patna	36222400	44651000	-8428600	1.23
Shahabad	3289540	4145479	-855939	1.26
Mozuffarpur	7921087	6767347	1153740	0.85
Darbhanga	3217160	2495450	721710	0.78
Sarun	10166038	9570371	595667	0.94
Chumparan	5438007	1390248	4047759	0.26
Monghyr	4307584	3145763	1161821	0.73
Bhagalpur	5215086	4035668	1179418	0.77
Purania	4962769	6462808	-1500039	1.30
Sontal Parganas	4907655	4985149	-77494	1.02
Orissa				
Balasore	4021295	3435884	585411	0.85
Cuutack	2917394	1188059	1729335	0.41
Puri	732570	101274	631296	0.14

『年次報告書(1876)』、p.105.

表6: 県別輸出入比(昇順)

District	輸出 金額(ルピー)	輸入 金額(ルピー)	出超	輸入/輸出 (昇順)
Bengal				
Dinajpur	4803710	815818	3987892	0.17
Jalpaiguri	1760446	421188	1339258	0.24
Tipperah	6062043	1707402	4354641	0.28
Bogra	2474798	859908	1614890	0.35
Noakhali	2496489	872040	1624449	0.35
24-Parganas	16445309	5942144	10503165	0.36
Cooch Bihar	1526834	558372	968462	0.37
Rajshahi	9078551	4397998	4680553	0.48
Bribhum	2353810	1202000	1151810	0.51
rangpur	9324421	4800465	4523956	0.51
Jessore	12175110	6758342	5416768	0.56
Hugli	12929285	7251856	5677429	0.56
Bardman	10732271	6368225	4364046	0.59
Mednipur	10963175	6840133	4123042	0.62
Mymensingh	13255630	8358033	4897597	0.63
Murshidabad	10201424	7399066	2802358	0.73
Bakarganj	10978484	8231597	2746887	0.75
Maldah	3216167	2756807	459360	0.86
Nadia	22015300	20778600	1236700	0.94
Pabna	22052773	23245900	-1193127	1.05
Faridpur	19490440	23436480	-3946040	1.20
Chittagong	3316359	4422781	-1106422	1.33
Dacca	19441945	32457100	-13015155	1.67
Behar				
Champaran	5438007	1390248	4047759	0.26
Monghyr	4307584	3145763	1161821	0.73
Bhagalpur	5215086	4035668	1179418	0.77
Darbhanga	3217160	2495450	721710	0.78
Mozuffarpur	7921087	6767347	1153740	0.85
Sarun	10166038	9570371	595667	0.94
Sontal Parganas	4907655	4985149	-77494	1.02
Patna	36222400	44651000	-8428600	1.23
Shahabad	3289540	4145479	-855939	1.26
Purania	4962769	6462808	-1500039	1.30
Orissa				
Puri	732570	101274	631296	0.14
Ccutack	2917394	1188059	1729335	0.41
Balasore	4021295	3435884	585411	0.85



RAILWAYS
AND
INLAND NAVIGATION
Section 2

Taken
from
Imperial Gazetteer
Atlas of India
(1931)

REFERENCE
5' 6" Gauge

LOWER
BURMA

Open

Calcutta to Chittagong 330 Miles
Calcutta to Port Blair 875 Miles
Calcutta to Rangoon 750 Miles
Rangoon to Port Blair 875 Miles
Rangoon to Vizianagaram 810 Miles
Rangoon to Bhamo 350 Miles